

偽書 ロックマンゼロ

スケイス2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

科学が栄華を極めた時代……

人類の叡智は、己が写し身すら創り出した。

『レプリロイド』——自ら思考する新たなロボット。人間の隣人となる筈の彼らが起こした幾度にも渡る反乱は、星を疲弊させた。

住む場所を追われた人々は、新たな理想郷を創り上げた。

『ネオ・アルカディア』

彼の地は生きる者全ての楽園。しかし、それは真実の姿では無かった……

※pixivにも掲載しています。

目次

龍咆哮	128
第伍話 Evil Dragon	108
走列車	80
第肆話 Crazy Train	27
憶	4
第參話 Lost Memory	1
第貳話 Sword wind	
第壹話 Rebirth	
序章	
英雄再誕	

〈序章〉

男は眠りに就こうとしていた。

永い永い、いつ醒めるとも知れぬ眠りに。

「どうしても、なのか?」

男の背中に向けて、絞り出したかの様な声が掛けられた。

その声の主は、男の親友だった。幾多の死線を共に潜り抜けてきた掛け替えの無い

……

「今の技術なら、『あのウイルス』に対する有効なワクチンだって、きつと作り出せる。それに君の身体だって——」

そこまで言つて、親友は続く言葉を飲み込んだ。眼前の男の背中越しに見えたその横顔、その瞳が意志の輝きに満ちていたから。

「……一つ、頼まれてくれないか?」

「え?」

そう言つて、男は振り返り、親友に『あるモノ』を差し出した。

「これは……」

親友は、男が差し出したモノが何であるかをよく知っていた。ソレは男が己が命を乗せ、誇りを貫き通す為に必要なモノだ。

「コイツを預かっていてくれないか？」

男の紡いだその言葉を、親友は理解出来なかった。自分の知る限り、自分から殆ど手放す事の無かったソレを、他人に預けるなんて……

解り易い位、動揺している親友に苦笑しつつ、男は続けた。

「……少しの間だけだ」

その言葉を聞いた親友は、ほっ、としたと様に溜め息を吐（つ）いた。

そんな親友の姿を眺めつつ、男は笑う。

コイツは、本当に変わらない。多くの戦いの末、バージョンアツプを繰り返して、幾分か外見が変化した親友だが、精神（ココロ）だけは、本当に変わっていない。尤も、それは自分にも言える事かも知れないが。

「——解った。君が戻るまで、コレは俺が預かっておく」

自分が差し出したソレが親友が手に渡ったのを見届けた男は、満足そうに頷くと、背を向け、開け放たれた大扉の向こう側へと足を踏み入れた。やがて彼が完全に向こう側へと入った瞬間、大扉が世界を二つに分かつかの如く、ゆっくりと閉まっていく。

そして、大扉が閉まり切る瞬間、僅かな隙間から男は親友に向けて最後の言葉を贈つ

た。

「また、会おう……エックス」

親友もそれに応えた。

「ああ……ゼロ！」

男は眠りに就いた。

いつ醒めるとも知れぬ永い眠りに……

第壹話 Re—Birth ～英雄再誕～

鬱蒼と繁る原生林の奥深く、古の時代の面影を色濃く残す場所。その中心に位置するかつて研究所だったであろう遺跡に、彼等は訪れていた。

深緑色の装束に身を包んだ姿は、軍人にも見えなくは無いが、その割には挙動の一つ一つに統率性が見られなかった。

そんな集団の中に一人だけ、鮮紅色の衣服に身を包んだ少女が居た。

「ハハハが……」

少女は、神妙な面持ちで、眼前に聳える建造物を見上げていた。

既に放棄されて久しいその場所は、周囲の木々と同化して在りし日の姿を失いかけおり、人々の記憶からも忘れ去られようとしていた。そんな場所を好んで訪れる者など、精々^{すきもの}好事家くらいだろう。

だが、彼女——否、彼女達は自分からこの深緑の遺跡を訪れていた。

「シエル」

背後から声をかけられ、少女は蜂蜜色の金髪（ハニーブロンド）を靡かせて振り返った。

「爆弾の設置は終わった。いつでもいける」

駆け寄ってきた緑装束の男が遺跡の入り口付近を指し示しながら、少女——シエルに報告した。

それを受けたシエルは、複雑な表情を浮かべながら緑装束に問うた。

「ねえ、ミラン……私たちのやろうとしてる事って、本当に正しいのかしら……？」
「え？」

シエルは、苔むした外壁に手を当てた。自らの体温が、この向こう側に眠る得たいの知れない何かを感じ取っているのだ。

「ココは、私たちが足を踏み入れて良い場所じゃない……そんな気がするのよ」

「そんな!? だったら、俺達はどうやって生きていけば良いんだ!」

「それは……」

鬼気迫る形相で食って掛かるミランに、シエルは何も言う事が出来なかった。

「もう俺達にはこれしか方法が無いんだ! シエルだつて解つてるだろう?」

「そうだ。彼らにはもう『後が無い』のだ。このまま黙つて死ぬ位なら、生き残る為に禁忌をその手に。」

そんな手段を講じなければならぬ程に、彼らは追い詰められているのだ。

「……そろそろ行くよ。シエルも後から来てくれ」 そう言つて、ミランはどこかへ走り

去って行った。

一人残された少女は、静かに眼を閉じた。そんな彼女の瞼の裏に去来したのは、希望か、それとも絶望なのか……

暫く経った後、ミランが戻って来た。しかし、その尋常ならざる様子を目の当たりにしたシエルは、眉を蹙めた。何かあったのか？

「た、大変だ！ シエル！」

ミランは仲間内では、リーダー的存在として頼りにされている。その彼が必死の形相を浮かべていた。不測の事態が起こったとしか思えない。

「奴等が来たんだ……！ ネオ・アルカディアがッ！」

ミランの叫びを聞いたシエルの顔がみるみる青褪めていった。

その時、遠くで爆発が起こり、地響きが大地を駆け抜けた。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ッ！」

シエルは走っていた。迫る驚異から逃れる為に。

背後では、銃声や悲鳴、爆発音などが一緒くたになった混沌じみた音色が奏でられていた。それを耳にしたシエルは恐怖に突き動かされ、必死に脚を動かして、先行するミラン達を追いかけた。

——シエル！

その時だった。シエルが耳元で何者かの声を聞いたのは。そして、それは彼女のよく知る声だった。

「パツシイ!? パツシイなのねー」

頭に付けていた特殊ゴーグルを目元の位置まで下げたシエルは、何も無い虚空へと視線を向けた。否、正確には何も無い訳では無い。ただ、見えないだけで、確かに存在しているのだ。『電子の妖精』の異名を持つプログラム生命体——サイバーエルフ・パツシイが。

——シエル、この先に強い力を感じるわ。多分、そこに……。

本来ならば、人間には視認する事が出来ない筈のプログラムの友人をゴーグル越しに見たシエルは、安堵すると共に焦りを感じた。

『ネオ・アルカディア』の襲撃を逃れる為に遺跡の内部へと逃げ込んだまでは良かったのだが、風化が進んでいた通路のあちこちは崩れ、塞がっており、まるで迷路の様になっ

ていた。その上、散発的に繰り返される小競り合いにより十人以上いた筈の仲間達は、今やシエルを含めて僅か五人程にまで減っていた。このままでは、全滅してしまうかもしれない。

だが……それでも……

それでも、手に入れなければならぬモノがココにあるのだ。

「パツシイ、それは確かなの？」

「うん！」

シエルは、今まで心の奥底に沈殿していた疑念が、確信へと昇華されてゆくのを自覚した。

「ミラン！」

「了解だ！ シエル！」

シエルとパツシイのやりとりを全て聞いていたミランは、懐から暗緑色の鉄の塊を取り出した。手榴弾だ。

やがて走るシエルらの前に、巨大な鉄扉がその姿を現した。

ソレは他のモノとは違い、あまりにも大きく、あまりにも圧倒的だった。しかも、中央の宝玉状のコアを中心に、光が複雑な軌道を描きながら扉の表面を走っている。これらの異様さから、この扉の向こう側が重要な区画だと言うのは、ほぼ間違い無いだろう。

大扉を視認したミランは、手榴弾の安全ピンを引き抜き、巨大な威容目掛けて投げつけた。

「皆、伏せろッ！」

ミランの声を合図に、後方のシエル達は、一齐に地面に伏した。そして――

冷たい鉄の塊が灼熱の焰へと変わった。

空間をも揺るがす轟音と、猛然と吹きつける熱風。それをやり過ぎ、顔を上げたシエル達の瞳に映ったのは、崩壊した扉とその向こうに広がる暗闇だった。

あそこには、自分達の求めるモノがある……

希望が再び確信に変わるのを自覚したシエルは、疲弊した身体を起き上がらせると、覚束無い足取りで歩き出した。

「……行きましょう、みんな。あそこに、私達の希望が……」

大扉の向こう側の空間は、百余年もの間、外界から遮断されていたにも関わらず、澄んだ大気が満ちていた。

「……………」

もしかしたら、この場所は本当に侵してはいけない場所なのかもしれない。シエルの脳裏に、そんな疑念が頭をもたげ始めた時、奥の方を探索していたミランが上擦った声

を上げた。

「お、おい！ 来てくれ、みんな！」

その声を聞いたシエル達は、ミランの下へと走った。

周囲は闇一色だったものの、床までは風化していなかった為、走り回る事に支障は無く、ミランと合流するのはさほど苦にはならなかった。

「シエル、見てくれ」

シエル達が来たのを確認したミランは、手に持った大型ライトの光で、ある一点を示した。

「——!? っ、これは……」

円形の白色光が照らした先に在るモノを目の当たりにしたシエル達は、揃って息を呑んだ。

円く切り取られた其処に在ったのは——人形だった。

赤い鎧（アーマー）を纏うソレは、繰り糸の如く全身に絡み付いたケーブルも相まって、まるで壊れた操り人形（マリオネット）の様にも見える。そして、その見た目から悪趣味な雰囲気纏わりついていた。だが——

「ようやく……見つけたわ……」

それこそが、彼女達が探し、求めていたモノだったのだ。

「ゼロ……」

人形——『ゼロ』の醸し出す独特の美しさに魅入られたシエルは、我知らず手を伸ばしていた。

「シエル！ 危ない！」

何かに気付いたミランが、背後からシエルの首根っこを掴んで引つ張った。その時、彼女の足にぶつかって跳ね上がった石塊（いしくれ）がゼロの方へと飛んでいった。

「——ッ!？」

次の瞬間、舞い上がった石塊が爆発したかの様に弾けて消失した。

「これは……バリア？」 見えない壁の存在に気付いて、シエルは己の愚かさを恥じた。これだけ嚴重に封鎖されていたのだ。封印（プロテクト）の一つや二つ、あつて当たり前。その事を失念していたなど、科学者として失格に等しい。

「シエル。コイツを解除する事は出来ないのか？」

「……ダメ。コントロール装置は全てバリアの内側にあるみたい」

シエルは、苦虫を噛み潰した様な表情で呻いた。

確かに、彼女の言う通り、封印のコントロール装置はバリアの内側——『ゼロ』の足下にあった。おそらくは遠隔操作も出来る様になっている筈だが、現在の装備ではどう

しようも無かった。

「畜生オツ！ 折角、ココまで来たって言うのに……」

悔しさの余り、仲間の一人が感情を乗せた拳を地面に叩きつけた。手に届きかけていたモノが再び離れていってしまったのだ。当然の反応だろう。

しかし時刻む神は、彼女達に絶望する暇すら与えてくれなかった。

突如、シエル達の背後から銃声が起こった。その直後、一番後ろに居た仲間の一人が、くぐもった呻き声を上げながら倒れた——撃たれたのだ。

振り返ったシエルの瞳に映ったのは、深紅の単眼を輝かせた鋼鉄の兵隊の群れが、自分達に銃口を向けている光景だった。

「くっ……」

ミランを先頭とした緑装束達が、各々手に持った旧式携帯銃を兵隊の群れに向け、一斉に銃爪を引き絞った。

兵隊達も、腕部と一体化したバスターからエネルギー弾を掃射して、対抗した。

初めは、互角の戦いを繰り広げていた両者だったが、武器の性能差か、一人、また一人と緑装束達が倒れてゆき、最後にはミランと後方のシエルだけとなっていた。

「クソ……」

生き残ったミランが、決して諦める事無く戦い続けていたが、押し潰されるのは時間

の問題だった。そんな中、一体の兵士がシエルの存在に気付き、彼女へと銃口を向けた。
「——ッ!？」

兵士達のバスターが火を噴いた。刹那、シエルは死を覚悟し、思わず瞳を閉じた。しかし、いつまで経つても、死を運んでくるハズの痛みと衝撃が襲って来る事は無かった。
「……………?」

恐る恐る、眼を開けたシエル。

蒼色の瞳に映ったのは、自分を庇う様に立つミランだった。兵士達のバスターから彼女を護ったのだ。

「ミ、ミラン……………」

胴体を貫かれ、立っている事すら奇跡に近いミランは、最後の力を振り絞って頭（こうべ）を巡らせると、シエルに微笑みかけた。

「シエル……………みんなを……………頼……………む……………そして……………おれた……………ちに……………じ……………ゆ……………う……………を……………」

そう言い残し、ミランは地面に倒れ伏し、仲間達と同様にその命を散らした。

「あ……………ああ……………」

とうとう一人になってしまったシエルの心は、絶望に埋め尽くされてしまった。

漸く、理不尽な力に抗う術を見つけたと言うのに。もう少しで手に入ると言うのに!

その代償に仲間達の命を差し出せと言うのか!?

鋼鉄の兵士達が群れをなして接近してくるのにも気付かず、シエルはいる筈の無い神を、そして不甲斐ない己を呪い続けた。

もう疲れた……

——ルウ!

もうどうでも良くなってきた。

——エルウ!

いつそのこと、ココで——

——シエルウ!

シエルがその声に気付くまで、少しの時間を要した。

顔を上げた少女の虚ろな瞳に映ったのは、覚悟を決めた真剣な面持ちを湛えた小さな親友の姿だった。

「……パツシイ?」

——シエル、私の力を使つて。

「え?」

——そうすれば封印（プロテクト）を解除出来るわ。

パツシイの提案に、シエルは愕然となった。

サイバーエルフは、一度その能力を發揮してしまえば、消滅——即ち、死んでしまう。それを知っていたシエルは、友（パツシイ）がそんな行為に走るのを許せなかった。

「ダメよ！ そんな事したらパツシイが……」

——シエル。ここで貴女が死んでしまったら、みんなの事はどうするの？

「……………」

——みんなはシエルの帰りを待つてるの。だから、貴女は何としても生きなきゃいけないの！

悲痛な友の訴えは、絶望に覆い尽くされたシエルの心に一つの想いを蘇らせた。

そうだ。自分はこんな所で死ぬわけにはいかない。

帰りを待つてくれる者達に『希望』を持って帰るまでは、何が何でも生き残らねばな

らない。泥を被つても、血を啜つても……

シエルは顔を俯けたまま、掌を前方に翳した。

「パツシイ」

——……………うん。

シエルの呼び掛けに応えたパツシイは、友の掌の中で、その身を光に変えた。

「ごめんなさい、パツシイ。私にもつと力があれば……」

——ううん。アタシはサイバーエルフだから……多分、これで良かったんだよ。

「私、パツシイの事、絶対に忘れない」

シエルはおもむろに腕を上げた。それと同時に、光と化したパツシイは、その輝きを強めた。

——アタシもよ、シエル……………サヨナラ。

輝きが極限の域に達した。

シエルは、命を燃やさんとする友を、眠る機械人形——否、それを守護する封印壁（プロテクト）へと向けた。

「パツシイ……ッ！」

少女の哀哭と共に、電子の妖精はその命を全うした。友と、その後ろに居る者達の願いを叶える為に。

そして、光が、爆ぜた。

巻き起こった白亜は少女だけでなく、冷たい機械仕掛けの兵士達をも無へと染め上げた。

刹那、少女の頬を一筋の雫が伝った。

かつて、この世界には英雄が居た。

優しき蒼と強き紅（あか）。

二人は、世界に災いをもたらす邪悪と幾度にも渡る戦いを繰り広げ、倒してきた。そして、世界に平和が訪れた時、全てを蒼に託し、紅は人知れず眠りに就いた。もう、自分が必要な時が来ない事を願って……

時は流れ、彼の偉業は伝説として、人々の間で語り継がれた。

光る刃を自在に操る紅の英雄、その名は――

「ゼロ……」

光が収束し、一時的に剥奪された視力を取り戻したシエルは、眼前に佇む紅の影を見て、そう呟いた。

ゼロ――それは、伝説の紅の英雄の名。

シエルの眼前に佇む影も紅の身体ボデイを有していた。が、それ以上に目を引いたのは、ヘルメットから零れた鮮烈な輝きを孕む金色の長髪だった。見る者によつては、研ぎ澄まされた刃の様にも見えるソレは、紅のボディと相まって、恐ろしいまでの美しさを醸し出していた。

「……………」

静かに佇む紅の影は、ゆつくりと周囲を見回した。冷たい壁と群れなす機械、そして

……

「あ……」

紅の影——ゼロに見つめられたシエルは、彼の瞳が何も映していない事に気付いた。光無き黒瞳は、どこまでも深く、暗く、そして深かった。

シエルは吸い込まれる様にゼロの瞳を見つめていた。闇に隠された彼の心を覗き込むかの様に。その時だけ、彼女達の周囲は、時が止まっているかの様に、静寂を孕んだ大気に満ちていた。

「あの——きやあッ!」

張りつめていた空気を引き裂いたのは、シエル達を取り囲んでいた兵士の一人だった。それを口火に、残りの兵士達が一齐に攻撃を再開した。

死を運ぶ光弾の雨に晒されながらも、ゼロは動じなかった。それどころか、足下に落ちていたミランの銃を蹴りあげると、それを手に取り、引き金を引いた。続けざまに放たれた弾丸は、兵隊の単眼を——電子頭脳ごと——貫いた。

それによって、完璧だったハズの隊列に乱れが生じ、穴が出来た。それを見つけたゼロは、シエルを抱きかかえて走り出した。

「え? ええッ!」

状況を飲み込めていないシエルを尻目に、ゼロは走った。目指すは、鋼鉄の壁に出来たたった一つの綻び。

しかし、兵士達がそれを許すはずも無く、銃口は全てゼロとシエルに向けられる。が、紅き英雄は更に速く、迫り来る光弾よりも速く駆け抜ける。そして遂には、鉄（くろがね）の包圍網を突破する事に成功した。

残された鋼鉄の兵士達は、直ぐに隊列を組み直して追跡に入ったが、その時には逃亡者の姿は完全に消失していた。

「ハア……ハア……」

あれから、どれ位時間が経ったのだろうか？

シエルは、呼吸を整えつつ、現在の状況を整理した。

あの部屋から脱出した後も、敵の攻撃を止む事は無かった。通路のあちこちに潜んでいた敵の熾烈な砲火に晒されたが、それでも何とか生き延びる事が出来た。ゼロの陰で。

落ち着きを取り戻したシエルは、自分達が逃げ込んだ部屋を改めて見回した。他の部屋よりも広く造られた広間とも言える空間には、朽ちかけた空っぽのカプセルが、幾つも並べられている。この事から、おそらくは実験棟か何かなのだろうと彼女は推察した。

最後に、シエルは眼前に立つ男に視線を向けた。

ゼロは、こちらをじっと見つめていた。

この広間に来るまで見せた戦闘能力は、正に英雄と呼ぶに相応しい。しかし、シエルには、どうしても引つかかる事があった。

それは、彼の眼だ。

ゼロの瞳はあまりにも暗く、深い。シエルは、そこから何かを見出だす事が出来なかった。本当に空っぽなのだ。

「……………あの」

暫し思考に重ねていたシエルだったが、やがて意を決し、眼前の男に呼び掛けた。

それに対し、ゼロは——僅かだが——目に見える反応を示した。意志疎通が可能と確信したシエルは、続く言葉を紡ぎ出そうとした。その時——

「きゃあああッ!?!」

二人を分かつかの如く、鋼造りの床が弾け、その下から機械の巨人が出現した。

吹き飛ばされたシエルが、巨人の伸ばした腕（かいな）に捕らわれてしまった。

「……………ゼロ……………逃げて……………ぐうッ!」

苦しげに呻くシエル。鋼鉄の掌が彼女の身体を締め上げているのだ。

それを見たゼロは、すかさずバスターショットの銃爪（トリガー）を引き、黄金色の

光弾を放つ。しかし、兵士のボディの数倍の硬度を有する巨人の腕を破壊する事は出来なかつた。ならば、とゼロは巨人の体軀へと狙いを変えた。が、全弾はじかれてしまう。よくよく考えれば腕が強固ならば、身体（ボディ）は同等、もしくは、それ以上なのは道理だつた。

休み無く放たれる敵の攻撃を鬱陶しく思ったのか、巨人は口腔内に取り付けられた砲身から極太のレーザーを発射した。

ゼロはそれを回避した。が、滅びを孕んだ光の咆哮は、床、壁、そして天井を抉り、そこから生じた大量の瓦礫を彼の頭上に降らせた。それを巧みなフットワークでかわすと、剥き出しになつた砲身——内部機構目掛け、バスターショットを放つ。

その攻撃は命中し、巨人は一瞬たじろぐ。しかし、致命傷には至らず、巨人は依然として活動を続けていた。

ゼロは、未だ立ち続ける巨人を見据え、微かに眉を顰めた。攻撃が通用しない。このままではジリ貧だ。

巨人は、そんな敵手を嘲笑うかの様に咆哮すると、再び口腔内に光を集めた。今度こそ全てを滅するかの如く。

その時。

——ゼロ……

ゼロの背中に面した壁に備えつけられていたコンピュータ端末のモニターに光が灯り、そこから中性的な少年の声が出たのは。

振り返ったゼロ。その瞬間、彼の足下に何かが刺さった。

「――！」

それは剣だった。白い金属製の柄と三角形を象った光の刃で構成された一本の剣。

ゼロは、何故かソレに懐かしさの様な感覚を覚えた。まるで、そう、遠い昔からの友の様に……

――サア、ハヤクソレヲツカッテ……

それは、原子モデルの様なモノを表示したモニターから発せられる声に対しても同様だった。聞いていると、どうしようもなく懐かしい感覚に襲われる。

ゼロは、その事について訊ねようと口を開いた。

「お前は――」

――キミハカノジョヲタスケタインダロウ？

遮る様に発せられた声により、ゼロはシエルの事を思い出した。

だが、その時には、巨人は光の奔流を咆哮に乗せて放っていた。

放たれた光は、ゼロを呑み込み、床を穿った。部屋中が灰色の灰塵に包み込まれる。それを目の当たりにしたシエルの顔は青ざめ、巨人は歓喜にも聞こえる低い駆動音を上

げた。

やがて、塵混じりの濃霧が晴れ、辺りの景色が明瞭になり始める。そして、霧の中心部が微かに揺らめいた刹那、一筋の光が灰塵を切り裂き、吹き飛ばした。

「あ……」

シエルは、驚愕に眼を瞠った。光の直撃を受けたゼロが無傷で佇んでいたからだ。そして、その手には光の剣が握られていた。彼はそれを駆使して、光の咆哮を受け流したのだ。

「ゼロ……」

光の剣を持つ男の姿に、シエルは我知らず歓喜にうち震える。伝説では、紅き英雄は光の剣を振るっていたと言われていた。今のゼロは、正に伝説の通りの姿だったのだ。

光の剣構え直したゼロは、敵手目掛けて走り出す。対する鋼鉄巨人も、再び滅殺の咆哮を放たんと口腔に光を収束させた。

だが、ゼロはそれよりも疾かった。

一瞬で巨人の鼻っ面に飛び込んだゼロは、光の剣を勢い良く降り下ろした。

縦一閃！

砲身ごと頭部を切り裂かれた巨人。その直後、充填されていたエネルギーが捌け口を失った事で暴発し、鋼鉄の巨体が紅蓮の焰となって爆ぜた。

目覚めてから最初に見えたのは、暗闇だった。

一瞬、自分は死んでしまったのか？ と錯覚したシエルだが、身体中に残る疲労感がそれを否定した。

どうやら、先程の戦いの時、いつの間にか気を失っていたらしい。

シエルは頭（こうべ）を巡らせ、周囲を見回す。すると、すぐ傍らでゼロが自分を見つめている事に気づいた。

シエルは、横たえていた身体を起こした。その時、視界の端——遙か上方に大きな穴がある事に気づいて、彼女は自分達が今何処に居るのかを悟った。

「……奴の爆発から身を守るには、こうするしか無かった」

横合いから掛けられた声に、シエルの身体が小さく跳ねた。今まで、一言も喋らなかつたゼロが初めて言葉を発したのだ。驚くのは当然だろう。

ゼロの声は限界まで研ぎ澄まされ、芸術品の域にまで達した刀剣の様な強さと無骨さを感じさせた。思わず、その声に聞き惚れてしまいそうになった。が、かぶりをぶんぶん、と振って、何とか気を取り直した。

そして、先程上で聞こうと思っていた事を訪ねようと、神妙な面持ちで言葉を紡ぎ出した。

「ゼロ……。貴方に聞いておきたい事があるの」

そこまで言つて、シエルは『その先を』を言うのを躊躇してしまった。

もし、そうじゃなかったら……

その疑念が、彼女に次の一步を踏み出させない為の枷となつていた。しかし、いつまでもこうしてはいられない。意を決したシエルは、続く言葉を紡いだ。

「貴方は……本当に『ゼロ』なの？」

勿論、シエル自身は彼がゼロだと信じている。先刻の戦いを見ているから尚更だ。しかし、万が一、そうでは無いとしたら……

心中で葛藤する少女に、ゼロが返した答えは淡々としていた。が、その内容はシエルの予想の斜め上を行つていた。

「……解らん、何も思ひ出せない……」

額を抑え、呻く様な声で漏らすゼロ。百年にも渡る永い眠りの中で、紅きの英雄はその記憶を失つていたので。

それを知つたシエルの心に去来したのは、安堵とも、落胆とも言えぬ複雑な感情だった。

「……取り敢えず、一緒に来て。私達の基地に案内するわ」

しかし、それでも……

「いいの？ 俺はその『ゼロ』じゃないかもしれないんだぞ？」

「それでも……私にとって貴方はもう『ゼロ』なのよ」

シエルの想いを聞いたゼロは、眼前の少女の蒼瞳を見つめた。

一方、シエルは光を映さぬ黒瞳の孕む妙な威圧感に眼を背けそうになったが、精一杯の意志を以て見つめ返した。

やがて、全てを悟ったかの様にゼロは瞼を閉じた。

「……俺も、一つ訊いてもいいか？」

幾星霜の時を越え、深き眠りから目覚めた紅の英雄。

彼は己（おの）が記憶を失い、その存在意義すら見失っていた。だから、彼は問うた。自分を眠りから解き放った少女に。

俺を目覚めさせて、どうしようって言うんだ——

第弐話 S w o r d w i n d 劍風

人間に極めて近い機械人形（ロボット）——レプリロイド。

彼等は常に人間の傍らに立ち、時にその力となる事で共に、降りかかる幾多の困難を乗り越えていった。やがて、地球最後の理想郷・ネオ・アルカディアが誕生した事で彼等には永遠の『平和』約束される……ハズだった。

降り注ぐ光が強ければ強いほど、大地に刻まれる影は暗く、そして深いのだ。

ネオ・アルカディアは、レプリロイドにとつては地獄の世界だった。イレギュラー撲滅の名の下に、次々と処分される罪無きレプリロイド達。たとえ、運良く逃げ延びる事に成功したとしても、ネオ・アルカディアに彼等の居場所はもう無かった。そうして、樂園から追われた者達の多くは反抗組織（レジスタンス）の一員として生きてゆく事を余儀無くされた。

「レジスタンス、か……………」

それがココに来て、一番最初に発した言葉だった。

廃研究所でメカニロイドから助け出した少女に連れられたゼロは、レジスタンス・ベース——ネオ・アルカディアに反抗する地下組織の拠点——へと足を踏み入れていた。

シエルと名乗った少女によると、この基地はネオ・アルカディアが出来る以前に主流だった大都市跡の地下施設を再利用しているとの事。その為か、ベースのあちらこちらに老朽化した箇所が目立つ。この状態で攻撃を受けでもしたら、ひとたまりも無いだろう。

視線を落とし、辺りを見回すと視界の端に、チラチラと幾つもの人影が映った。

ココの住人だろうか？

通路の陰、柱の陰、扉の陰、コンテナの陰。ありとあらゆる場所から彼等はゼロを、その暗く濁りきった瞳で見つめた。視線を巡らせると、彼等は逃げる様に身を隠した。

「……ごめんなさい。だけど、みんな悪気は無いの」前方を歩くシエルが申し訳なさそうに言った。「ただ、ネオ・アルカディアとの戦いに疲れ果ててしまっていて、外から来た人に対しては、どうしても頑なになってしまふのよ」

その言葉を聞いて、納得した。彼等の眼の奥底に沈殿していたのは、諦念だ。反抗する者（レジスタンス）でありながら、抗う事も、戦う事も、あまつさえ生きる事さえも諦めてしまっているのだろう。

「……着いたわ」

前方を歩いていてシエルが足を止めた。視線を戻したゼロは、彼女の前に流線形の機械が鎮座している事に気付いた。古びた乳白色のシルエットは、獣の唸り声に似た駆動音を放っていた。

「これは？」

「トランスサーバーよ。一定の範囲内なら、コレを使つて色々なモノを転送する事が出来るわ」

振り返つたシエルは、真剣な面持ちでゼロに告げた。

シエルと機械を交互に見たゼロは「……俺に何をさせるつもりだ？」と問いかけた。その直後、少女の小さな肩がまるで何かを恐れるかの様に小さく跳ねた。そのまま顔を俯けた彼女の表情を窺う事は出来なかつたのだが、唇を強く噛み締めていた事だけは解つた。

暫くの間、両者の間に重い沈黙が横たわつた。

やがて、シエルは「さつきも話したけど、私達はネオ・アルカディアと戦っているの」と告げて、顔を上げた。病的なまでに白い肌は血の気を失い、青ざめていたが、サファイア色の瞳には何かを決意したかの様な真つ直ぐな輝きが宿っていた。

「だけど、所詮ゲリラ戦しか出来ないレジスタンスとネオ・アルカディアとは力の差は

歴然——多くの仲間の命が失われたわ」

その時、一瞬だけシエルの瞳に濁りが差した。先程見た住人達のソレにとても良く似ていた。

「でも、ね……まだ捕虜として生きている仲間もいるの！　せめて、彼等だけでも……！」

ゼロにも、漸くシエルが何を言おうとしているのかが解った。彼女はネオ・アルカディアに捕らえられた仲間の救出を自分に頼もうとしているのだ。その様子から、それが一筋縄ではいかない事は容易に推測出来た。それに、自分達で対処しきれぬのなら、わざわざ得体の知れない旧式レプリロイドに頼む必要など無い。問題はそれを受けるかどうかだが……答えは考えるまでも無かった。

「……何処に行けばいい？」

「え？」

「そいつらを助ける為には、俺は何処に行けば良いんだ？」

澱みの無い口調で告げた答え。それはシエルの青ざめた顔を喜びに彩るのに充分すぎる力を孕んでいた。

生気を取り戻した少女の唇から「本当に……本当に行ってくれるの？」と歓喜の言葉が溢れ出す。ゼロは黙って頷いた。それを見たシエルが、今にも泣き出さんばかりの表

情を浮かべた。

「じゃあ早速——」

「待て、シエル」

続くシエルの言葉を遮ったのは、後方の通路から現れた男達の先頭——一際目付きの鋭いレプリロイドが発した声だった。

「シエル、こんな胡散臭い奴になんか頼む必要は無いぜ。仲間の救出なら、俺達コルボーチームが任せろ！」

「胡散臭いって……ゼロは——」

「百年前の骨董品、だろ？　こんな奴に力を借りなくたって、俺達コルボーチームだって充分に戦える！」

先頭の男——コルボーが、悔しげに唸る様な声でそう言った。その後、ゼロを睨み付けると威圧する様な口振りで凄んだ。

「テメエの実力がどんなもんかは知らねえが、俺達の邪魔だけはするんじゃねえぞ……ッ！」

半ば恫喝じみた忠告だったが、それに動じるゼロでは無い。そんな彼の反応の薄さが気に食わなかったのか、コルボーは面白く無さそうに舌打ちし、仲間達を引き連れて去っていった。

ゼロは、その後ろ姿を無感情に見つめた。

「ごめんなさい、ゼロ。彼も悪気があった訳じゃないの……ただ、ちよつと気が立ってて……」

おそらくは、彼女の言う通りなのだろうが、ゼロにはそれだけではない様な気がした。視線を巡らせると、心配そうにコルボーの背中を見つめているシエルに問うた。

「アイツも救出作戦に参加するの？」

「え、ええ。多分……」

シエルの顔には、相変わらず暗い影が差している。先程、彼女はゼロにこう言っていた。

——ネオ・アルカディアとの力の差は歴然。

——多くの仲間を失った。

彼女は感付いているのかもしれない。このまま、あのコルボーと言う男を行かせたらどうなるのが……

「ソイツ（トランスサーバー）を起動させろ」

深く考えて出た言葉では無い。ただ、この少女に涙を流させてはならない、そう直感したのだ。

「出る……！」

ネオ・アルカディア本都の遙か南方——荒涼とした大地の上に、その施設はあった。完全に機械化された其処は、日々本都から吐き出される廃棄物（スクラップ）を休まずに処理し続けている。一見すれば、何の変哲も無い廃棄物処理場に見えるだろう。だが、そこにはあるもう一つの『顔』が存在していた……

結局、シエルの判断でゼロはコルボーチームと行動を共にする事になった。そのせいでコルボーが終始不機嫌な表情（かお）を浮かべていたが、それは彼の感知するところでは無かった。今は任務（ミッシヨン）遂行が全てだ。

トランスサーバーによって転送させられた場所は、一面の荒野だった。枯れ果てた大地には、命の気配は感じられず、乾いた風が無慈悲に吹き荒ぶだけだ。

〈ゼロ、聞こえる？〉

ゼロは、ヘルメットに内蔵された通信機から流れるシエルの声に耳を傾けた。出撃前にセルヴォオと言う技術者が取り付けたモノだが、問題なく作動している様だ。

「大丈夫だ。聞こえている」

〈そう……じゃあ、これからミッシヨンの概要を再確認するわ〉

シエルの口調が硬化した。それは、十四の少女がレジスタンスの指導者になつた瞬間

間だった。

〈現在、貴方達のいる場所は目的地の廃棄物処理施設から南方五キロに位置する砂漠地帯よ〉

吹き荒れる砂嵐の向こう側にうつすらと建物の様なモノが見える。それこそが、多くのレジスタンス隊員達が捕らえられた廃棄物処理施設、否、——レプリロイド処刑場だ。

〈今回のミッションは、捕らえられた仲間の救出が最優先よ。無駄な戦闘は極力避けて〉
ヘルメット内のスピーカーから流れるシエルの声を、ゼロは黙って反芻した。滔々と紡がれる言葉を一つ一つを己が身の内に取り込み、溶かしていった。視線を僅かに巡らせると、同じ説明を受けているであろうコルボーチームの面々の表情には緊張の色が浮かんでるのが見えた。ただ一人、コルボーを除いて。

「どう言う事だ、シエル！ 俺達に戦うなって言うのか!？」

〈最後まで聞いて〉コルボーが凄まじい剣幕でがなり立てるが、通信機の向こうのシエルは、構わず説明を続けた。〈この施設は、どうやら『ミュートスレプリロイド』が管理しているらしいの〉その単語が出た瞬間、ゼロ以外の——コルボーチームの面々が一齐に息を呑む気配が辺りに広がった。暫くして誰かが弱々しい口調で、ぽつりと呟いた。
「や、やばいんじゃないのか……」

それが発端となり、ざわめきの波紋は瞬く間に広がっていった。

マジかよ、なんでこんなトコロに、こりや逃げた方が良いんじゃないか、ミュートスレプリロイドに勝てる訳ねえよ……

絶望的な喧騒が蔓延し、先程まで勇ましく振る舞っていたレジスタンス隊員達が悲観的な慟哭を上げる中、一人だけ平静を保っている者が居た。ゼロだ。

「シエル」

〈どうしたの？ ゼロ〉

「何なんだ？ そのミュートスレプリロイドと言うのは」

そう問うて、シエルが答えるまで僅かな間があった。その後、漸く発せられた声を聞いた時、ゼロはそれが酷く震えている事に気付いた。

〈……ネオ・アルカディアには、軍部にあたる四つの戦闘部隊があるの。彼等はネオ・アルカディアに仇成す反逆者（イレギュラー）を狩る者——言うならば『イレギュラーハンター』。その力はパンテオンなんかとは比べ物にならないわ〉

「イレギュラー……ハンター……」

シエルの説明を聞いたゼロは、その単語に妙な引つ掛かりを覚えていた。かつて、どこかで聞いた様な……そんな懐かしさを感じさせる言葉だ。だが、それが何なのかをどうしても思い出す事が出来ない。まるで、頭の中に濃い靄（もや）がかかった様だった。

「お、おい！ あれを見ろ！」

コルボーチームの一人が上擦った声で騒ぎ立てたのは、そんな時だった。その場にいる全員が、彼の指し示す方へと視線を巡らせた。

彼等の見つめる先——スクラップ処理場の通用門（ゲート）から大量のレプリロイド兵士・パンテオンがレジスタンス目掛けて殺到した。その軍勢は、ゼロを含めて二十人にも満たないレジスタンスと比べて、倍以上の数を有していた。

レプリロイドでありながら、一切の表情を感じさせない紅の単眼（モノアイ）。それは、妖しい光を放ちながら、倒すべき敵を見つめている。

「……シエル、ナビゲートを頼む」
「へえ？」

シエルが疑問の声を挟むより早く、ゼロは駆け出した。

金色の軌跡を伴った紅い残像は、戦（おのの）くレプリロイド達を尻目に単身、機械兵士の群れに突っ込んでいった。突然の事に唖然となるコルボーチーム。リーダーであるコルボーもその一人だったが、一足早く我に返った彼は、放心状態の部下達を叱咤した。

「ぼ、ボサツとすんじゃねえ！ 俺達も行くぞッ！」

その怒声に促され、正気を取り戻したコルボーチームの面々は、リーダーであるコルボーに筆頭に単身、敵陣に切り込むゼロに続いた。

その空間を覆っていたのは、無数の映像だった。虚空に隙間無く映し出される無数の顔。男、女、若者、老人——矩形の奥からこちら側を覗く幾多の眼差しを、彼は受け止めていた。

白を基調としたボディに猛禽の意匠を孕むシルエット。言うならば、その姿は——鋼の神鳥。

彼の名はアステファルコン。イレギュラーに裁きを下す処刑人の異名を持つミュートスレプリロイド。

猛禽に似た頭を持ち上げたアステファルコンは、ゆったりと部屋全体を見回した。そして、大仰に両手を広げると、芝居がかった口調で語りだした。

「大変長らくお待たせ致しました。これより、皆様方には私、アステファルコンによるシヨウを御覧頂きます！」

大袈裟な仕種を交えながらアステファルコンは、無数の映像に語りかけた。直後、重厚なクラシック音楽をバックに、彼の周囲の床がスライドした。その中から現れたのは三本の十字架と、磔にされた傷だらけのレプリロイド達だった。

「ここに居るのは、愚かにもネオ・アルカディアに反旗を翻した逆賊（イレギュラー）に御座います」

アステファアルコンが言い終わると同時に、円形のスポットライトが十字架を照らし出した。白光が暴いたのは、緑の装束を纏ったレプリロイド——レジスタンスだ。

「所詮、彼等は生き永らえたトコロで意味など無い罪深き存在……で、あるならば！ その命を以て！ 皆様方の糧になる事こそ最後に残された贖罪！」

アステファアルコンの宣言が高らかに響き渡る。その直後、映像越しの拍手が暗い処刑場を埋め尽くした。それは、処刑人たる鋼鉄の神鳥への喝采であると同時に、罪人達へと忍び寄る死神の足音でもあつた。

やがて、恐怖に耐えきれなくなつたレジスタンスの一人がアステファアルコンに向かつて叫んだ。

「た、助けてくれ！ もう二度とネオ・アルカディアに逆らう様な真似はしない！ だから……」

オイルまみれになつた唇から、必死に命乞いの言葉を吐き出すレプリロイドをアステファアルコンは一瞥した。冷たい猛禽の眼に映るのは、大義や信念かなぐり捨て、己の弱さを晒け出した惨めなヒトガタ。

「……そうですか」

アステファアルコンは、溜息混じりにそう言った。それを聞いたレプリロイドの顔に怪訝そうな表情を浮かぶ。

「——では、まずは貴方からです」

恐らく誰一人、何が起きたかは理解出来なかつただろう。大気の温度が僅かに下がった。精々、その程度だ。それ位、鋼の神鳥の所作は速かつたのだ。

不思議に思ったレプリロイドの一人が、周囲を見回した。そして、先程無様に喚き散らしていたレプリロイドの姿を視界に収めた瞬間、思わず息を呑んだ。

命乞いをしていたレプリロイドの胴体に、巨大な雷の矢が突き刺さっていたのだ。既に動きを止めている筈の機械の亡骸が小刻みに痙攣している。残された者達の心に恐怖を植え付けるには充分過ぎた。

直後、処刑場に歓喜の叫びが甞した。

「フフフ……宴はまだ始まったばかりです……どうぞ最後まで心ゆくままにお楽しみ下さい」

コルボーチームとパンテオン部隊の攻防は、一進一退の様相を呈していた。

圧倒的な物量を誇る単眼の軍団に対し、数々の修羅場をくぐり抜けて来たコルボー達は、劣勢に立たされながらも必死に喰らいついていた。リーダーであるコルボー自身も指揮を執りつつ、先頭に立って戦っていた。

「いいか、野郎共オ！ 絶対に背中見せんじゃねえぞッ！」

半ば己に言い聞かせるかの様に、部下達を鼓舞したコルボー。背中での返事を聞く
と、満足気に唇を歪めた。

「そうだ。俺達でもやれるんだ。あんなヤツの力を借りなくとも……………ッ。」

敵陣に切り込んだコルボーは、口の中でそう一人ごちた。その時だった。彼の眼前を
紅い閃光が横切ったのは。

「真紅の装甲（アーマー）と鮮烈な金色の長髪——ゼロだ。」

光の剣を振るう紅の『英雄』は、視界を埋め尽くす機械兵士の群れの発する圧迫感に、
欠片も物怖じする様子も見せなかった。眼前に立ち塞がる敵を斬り伏せる。ただ、それ
だけ。だが、あまりにも圧倒的だった。

しかし、それがコルボーを益々苛立たせた。自分達には、それなりの修羅場を潜って
きた自負、そして自信もある。だが、それでもネオ・アルカディアの尖兵たるパンテオ
ンシリーズに対しては苦戦を強いられるのが現実だ。なのにあの旧式レプリロイドは、
たった一人で機械兵士の大部隊を相手にしているではないか！

「……………クソツタレ」

今までの自分達の戦いが否定された気がしたコルボーの舌から転がり出た小さな悪
態は、戦場の大きに掻き消された。

「オイ！ 野郎共——待てよ……………」

後に続く部下達に新たな命令を下そうとしたその時、彼の脳裏にある妙案が浮かんだ。己の前に立って戦う紅の背中を一瞥し、唇を歪めると、部下達に新たな命令を下すべく声を張り上げた。

「一気に突っ切るぞ！ 雑魚は『英雄』サマが倒してくれるー！」

「——!?!」

コルボアの発した命令を聞いたゼロが振り返ったが、構わずその横を通り過ぎた。

「後は頼んだぜ、『英雄』サマ」

すれ違い様に、コルボアは嘲る様な口調で、ゼロに囁いた。折角蘇ってくれたのなら……精々利用させて貰うとするさ。俺達の為に、な。

コルボアチームを止めようとしたゼロだったが、残ったパンテオンの群れに阻まれ、そこから先に進む事が出来なかった。眼前に立ち塞がる大量の紅の単眼が妖しく揺らめいている。それを睨み付けた彼は、おもむろにバスターショットのマガジンにゼットセイバーの柄を『装填』した。

一方の機械兵士達はゼロの挙動を警戒し、一定の距離を保っていたが、やがて危険は無いと断じたのか、最前列の数体が腕のバスターを変形させた電磁ブレードを翻して飛び掛かった。電光を孕んだ刃が斬り刻まんと大気を裂きながらゼロへと迫った。し

かし、当の本人は視線を揺らす事無く己を砕かんとする雷刃の切っ先を見据えた。

そして、交錯の瞬間、頭（こうべ）を僅かに傾けると同時にバスターショットを持った腕を跳ね上げた。

刹那——圧倒的な熱量が虚空を駆け抜けた。

バスターショットから放たれた鮮緑の光流は、眼前に立ち塞がる機械兵士の群れを一体残らず飲み込んだ。留まる事無く突き進んでいったソレは、通用門（ゲート）を破壊し、砂塵が吹き荒れる荒野へと消えた。後に残ったのは半ば溶解したパンテオンの残骸と、頬を掠めた電磁ブレードだけだった。

へげ、ゼロ……

シエルからの通信だった。その声音から通信機の向こうで、呆然とした表情を浮かべる彼女の姿を想像するのはそう難しい事では無かった。

へ今、ゼロの周囲に居たパンテオンの反応が一気に消えちゃったんだけど……

「時間が無かったからな。一気に片付けた」

へえ、ええッ!?

淡々としたゼロの答えを聞いたシエルは、通信機越しに上擦った素っ頓狂な声を上げた。その後ろでは、サポートを勤めるレジスタンス隊員達がどよめいていた。

彼女達が何をそんなに驚いているのかゼロには理解出来なかったが、今はそんな事を

気にしている場合では無い。

「シエル。先に言った奴等の反応を追えるか？」

「ええ、あ、うん。大丈夫よ、出来るわ」

「了解した。なら奴は——」

続きを言おうとしたゼロだったが、直上から降り注ぐ殺気を感じ取り、反射的にその場から跳び退った。直後、先程まで立っていた場所に小さな弾痕が連続して穿たれた。それを一瞥した後、彼は殺気を感じた方向を見上げた。

上空からゼロを見下ろしているのは飛行ユニットを装着し、悠然と虚空に佇んでいるライトグリーンのパンテオンだった。薄暗い空間の中で、禍々しく輝く真紅の単眼は、獲物を見つけた猛獣の眼（まなこ）によく似ていた。

「……生憎、今は貴様に構っている暇は無い」

ゼットセイバーを片手に、ゼロは敵手——パンテオン・エースを睨み付けた。こんな所で時間を無駄にしている余裕など無い。

「悪いが、そこを通らせてもらおうぞ……ッ！」

旧式の貨物式エレベーターのゴンドラに揺られながら、コルボーは静かに瞑目していた。その目蓋に去来するのは、彼——否、彼等レジスタンスの前に現れた紅き『救世主』

の後ろ姿。多大な犠牲を払って、漸く目覚めさせたあの男の力は、確かに素晴らしい。アレの力ならば、もしかしたらネオ・アルカディアに勝てるかもしれない。だが、それで戦いによって失われたモノが帰ってくる訳では無いのだ。

「クソ……どうしてアイツだったんだよ」

周りの部下達に気取られない様に、コルボーは口の中でそう呟いた。

「隊長、そろそろ……」

「……おう」

部下の一言で頭の中身を切り換えたコルボーは、両の眼を開けた。そう。今すべきは過去を見る事では無い。前に進む事だ。

頭（こうべ）巡らせた彼は、そのまま背後の部下達を見回した。ゼロと別れた後、ネオ・アルカディアの攻撃部隊とは殆ど遭遇する事は殆ど無く、お陰で誰一人欠ける事無く、ここまで来る事が出来た。だが、ここから先はそう簡単にいかないだろう。

やがて、ゴンドラ越しに伝わる振動が止み、錆鉄色の扉が耳障りな音を立てながら、上にスライドした。

この先にあるのは希望、それとも絶望だろうか……いや、それを決めるのは……

「ヨツシャアアッ！ 行くぜエ、野郎共オッ！」

「オオオオ……ッ！」

雄叫びと共に、処刑場に雪崩れ込んだコルボーチーム。進路上のパンテオンを自動小銃で薙ぎ倒す彼等の目の前に、巨大な鉄扉がその姿を表すのに、時間はそうかからなかった。

「隊長……」

部下の一人が不安そうな口調で言った。

彼等の眼前に聳える巨大な鉄扉の隙間から、得体の知れない——瘴気とでも言うべきか——モノが漏れだしていた。それに当てられたであろう何人かが気後れする気配を、コルボーは背中で感じ取っていた。しかし、今更引き返す訳にはいかない。もう前に進むしか無いのだ。

深呼吸を一つ。はやる感情を落ち着かせながら、おもむろに鉄扉に手を添えた。

少し力を入れるだけで扉はアツサリと開いた。ここまで簡単に事が運びすぎて、かえって不気味に思えたが、今はそんな事を気にしている場合では無い。

ゆつくりと開いてゆく鉄扉から光が漏れた。網膜センサに刺さる眩しさにコルボーチーム全員が目を細めるか、掌を顔の前に翳すなどの行動を取った。やがて、センサの処理が追いついてきた事により、扉の向こう側に広がる景色を認識出来る様になった。

そして、彼等は絶句した。

この施設に飛び込んでから通過した部屋の中でも、そこは一番広かった。機械を剥き

出しにした壁面。闇が溜まった天井。彼等が足を踏み入れたのは、おおよそ飾り気の無い空間であった。

だからなのだろう。『それ』が真つ先に彼等の視界に入り込む事が出来たのは。

部屋の中央には、不格好な鉄のオブジェが鎮座していた。それは無秩序で前衛芸術的『アヴァンギャルド』なデザインでありながら、およそ芸術とは縁遠いコルボーチーム達の目を釘付けにしていた。しかし、それは美しさによるものでは無い。その中に在るモノを彼等が見つけてしまったからだ。

「た、隊長……」

隊員の一人が呆然と呟いた。が、コルボーに答えてやれる余裕は無かった。一部隊を預かる彼ですら、目の前に広がる現実には、気が触れそうになつてゐるのだ。

コルボーチームの眼前に、悠然と聳える冷たいオブジェ。それを形成していたのは、大量の鉄屑とバラバラに分断された仲間達の骸だった。

いてもたつても居られず、慌てて駆け寄つたコルボーチームだったが、それは仲間の死、と言う現実を改めて認識するだけだった。

「……ッ！」

コルボーは、手に持った小銃を床に叩きつけたくなる衝動に駆られた。また間に合わなかつた。また助けられなかつた。俺達は持てる力を尽くしたと言うのに……

「どうして……救えねェんだよッ！」

悔しさに歪んだ唇から漏れたのは、己の無力に対する激情だった。コルボーは身体の内奥から何かが沸き上がるのを知覚した。それは全身を這い回り、心を黒く塗りつぶそうとしていた。

その時だった。何も存在しないハズの虚空に、無数の矩形が出現したのは。

「な、何だアツ!？」

何の前触れも無く現れた幾多もの矩形——空間ビジョンに肝を潰された一人の隊員が錯乱し、携行していた機関銃を乱射した。出鱈目に撃ち出された弾丸は、実体の無い映像をすり抜け、壁面に小さな火花を散らせた。

このままでは他の隊員達が被害が及ぶと判断したコルボーは、暴れまわる隊員を怒鳴り付けた。

「オイ！ 落ち着け！ ……誰かソイツを黙らせとけ！」

コルボーの命令を受けた隊員達は、錯乱した隊員を押さえ込みにかかった。初めは意味不明な喚き声を上げていたその隊員も、動きを封じられると徐々に大人しくなっていく。

それを確認すると、今度は虚空に投影される映像に目を向けた。小さな枠の中に収まっているのは、様々な貌(かお)だ。その中の殆どに、コルボーは既視感(デジャ・ビュ)

を覚えた。

「コイツらは……ッ！」

そうだ。思い出した。この部屋を埋め尽くさんばかりの映像の向こう側に居る貌。それは全てネオ・アルカディアの特権階級——自分達を地獄の世界へと追い込んだ奴等だった。

「ホウ……思ったより数が多いな」

頭上から尊大な気性を滲ませた声が降ってきた。

咄嗟に頭(こうべ)を跳ね上げた彼等の視覚センサに映ったのは、天井に溜まる闇。其処は何者の存在を許さない空間でありながら、何か得体の知れない気配を感じずには居られなかった。

隊員の一人が、それを見つけ出したのもそのせいなのかもしれない。

「お、おい……」

彼が指差した先にあつたのは、紅い光。気をつけていなければ見逃してしまいそうなほど小さな光点が二つ。まるで何かの眼の様に見えた。

視覚センサの感度を限界まで引き上げたコルボーは、その光を注視した。

刹那——『それが嘲った気がした』

背中に冷たいモノが伝った。あれは……危険だ！

反射的に跳び退った時には、既に事は終わっていた。降り注いだ雷の雨が逃げ遅れた隊員の身体を切裂き、貫通（つらぬ）き、打ち砕いた。目の前で無惨に壊されてゆく仲間達。だが、生き残った者達にそれを悲しむ暇は無かった。

闇の吹き溜まりから翼を持った影が、疾風を纏って飛び出してきたのだ。

「うわあああッ！」

吹き荒ぶ風が、その場に居る者達を全て吹き飛ばす。そして、まるで鉄屑のオブジェを守るかの様に、影はゆっくりと舞い降りた。

太古の昔、知識の象徴として人々から崇められた聖獣グリフォン。〈断罪〉を使命とする王の守護獣は、科学の力によって再び地上に顕現した。ミュートス・レプリロイド・アステファルコンとして。

神話にて語られる姿に酷似したアステファルコンの姿。だが、それが彼の全てでは無かった。ふわり、と舞い上がった鉄の神鳥の四肢が形を変え、鳥獣然としたシルエットをヒトに近いモノへと変貌していった。そして、最後に両の眼が禍々しく輝いた時、アステファルコンは鋼鉄の鳥人として再び地上に降り立った。

「パンテオン共がもつと数を減らしているとおもっていたが……ふむ、レジスタンスもなかなか悔れんな」感心した様な口調で、アステファルコンはそう呟いた。だが、その言葉の裏には絶対的な自信と傲慢が隠れていた。「ならば、丁度良い——いかがでしょ

うか、皆々様。ここから予定を変更して、この私アステファルコンと愚かなイレギュラー共による殺戮シヨウを執り行うというのはい!？」

翼と一体化した腕を広げ、アステファルコンは高らかに宣言した。直後、虚空に浮かぶ映像から響く拍手の音が部屋——否、処刑場を埋め尽くした。それを聞いたコルボーは、身体の内側に怒りの焰が燃え上がるのを知覚した。コイツらは楽しんでいるのだ。自分や仲間達が無様に殺されてゆく様を。

まるで、猛獣同士の殺し合いの見世物を見るかの如く……

「クソが……ッ!」

隠しきれぬ嫌悪感ごと、そう吐き捨てる己が衝動に従い、自動小銃を眼前の敵手へと向けた。

「ボサツとすんじゃねエ! 敵は目の前に居るんだぞ!」

隊長の激に呼応した隊員達も、一斉に手に持った火器の銃口を鋼の鳥人へと向けた。

これだけの火力があれば、いくらミュートスレプリロイドと言えどタダでは済まないだろう。そう確信したコルボーは、一斉掃射の号令を出すと共に、銃爪に掛けた指に力を込めた。

その瞬間、アステファルコンの瞳が笑みの形に歪んだ事に、だれも気付かなかった。幾つもの銃口から放たれた十字砲火が鋼鉄の神鳥に降り注いだ。数十、数百にも及ぶ

灼熱の顎あごがエネルギー製の装甲に牙を突き立てる……ハズだった。

「な……ッ!?!」

コルボーは驚愕するしかなかった。敵手を噛み砕くべくして放たれた弾丸が、全て弾かれてしまったからだ。

「クク……それで終りか？ イレギュラー」アステファアルコンが嘲る様な口調でそう言い、翼を広げた。「ならば——こちらから行くぞッ!」

刹那、鳥人の姿が幻の様に掻き消えた。

「——ッ!?!」

「ど、何処に行った!」

消えた敵手の姿を求めて、コルボーチームの面々は、各々視線を巡らせた。だが、想像を絶するスピードで戦場を駆け抜ける鋼鉄の鳥人を捉える事は、誰にも出来なかった。

「フハハハハハッ! 遅い! 遅すぎるぞイレギュラー共オ!」

姿無き敵の哄笑は、その場に居る者達の心に恐怖と言う名の楔を打ち込んだ。そして、彼が再びコルボーチームの前に姿を現した瞬間——

「があああああッ!」

苦痛に満ちた悲鳴と、いくつもの血の華が咲いた。

気づいた時には、アステファルコンは鳥人形態（レプリロイドフォーム）から神鳥形態（ビーストフォーム）へと、その身を変えていた。

そして、真っ赤な疑似血液（オイル）を返り血として浴び、事切れたレプリロイドの骸をくわえるその姿は、もはや神獣と言うよりも、悪魔と呼ぶに相応しかった。

「わああああッ！」

生き残った隊員の一部が、身体の奥底から沸き上がってくる恐怖を拭い去るかの様に小銃を乱射した。だが、鋼鉄の神鳥にそれが通用しない事は明白だ。

先程と同様に、自らに喰らいつかんと鉛の牙を全て弾き返したアステファルコンは、骸を放り捨て、愉快そうに笑った。

「いいぞ。もつと抵抗しろレジスタンス共！ そうすれば、シヨウは更に盛り上がるウツ！」

再び加速したアステファルコン。一瞬で鳥人形態へと変形し、敵手の背後へと回り込んだ。そして、彼等が気付く前に雷の矢を掃射した。

飛び散る疑似血液。撒き散らされる機械（パーツ）。

先刻まで、十数名程いたコルボーチームも、今や隊長のコルボーを残すのみとなつてしまった。

「あ……あ、ああ……」

半ば戦意を喪失したコルボーは、膝からくずおれた。

ベースを出る前まで、元気に笑い、馬鹿話などに花を咲かせていた仲間達は、今や物言わぬ只の骸となつてしまった。その事実を漸く理解した時、震える唇から零れたのは、声無き呻きだった。

「……………」まで、か」

つまらなそうに呟いたアステファルコンが一瞬で彼に肉薄し、呆然と揺れる頭を思い切り踏みつけた。

その衝撃で顔面のフレームが歪んだのを知覚したが、コルボーにはもう顔を上げる力すら残されていないかった。

「ネオ・アルカディアは、この世界における絶対正義にして神そのもの」鋼鉄の神鳥が、哀れな信者を諭す神父の如く床に突つ伏すコルボーへと語りかける。だが、煌々と輝く猛禽の眼にたゆたっていたのは純粹なまでの傲慢と自らが特別な存在だと信じてやまない盲信だった。「例えどんな理想を掲げようと、ネオ・アルカディアに仇なす貴様らイレギュラーは世界の敵なのだ！」

虚空を埋め尽くす映像から、歓声が沸き起こった。それに酔いしれるアステファルコンは更に続けた。

「そして、世界の敵が行きつく場所は——地獄だッ！」

猛禽の眼に膨大な量のプログラムが駆け巡った。すると、それに連動して床面がその様相を変えた。

「…………ツ!？」

光学迷彩機能が解除され、無機質なコンクリートから透明な特殊強化ガラス製へと変わった床。その遙か下方に、数人の緑装束が蠢いているのを、コルボーは見た。

アイツらは…………まさか！

それは、捕まった筈の仲間達だった。漸く見つけた。コルボーの瞳にほんの一瞬、希望の光が宿った。だが――

「あ…………」

漸く灯った小さな明かりを呑み込んでしまう程、その後を訪れた絶望は大きかった。

閉ざされた眼下の空間。その両端の壁が徐々に狭まってきているのだ。にじり寄り恐怖に耐えるべく、身を寄せ合うレプリロイド達も天井の異変に気付いて次々と見上げたが、コルボーの姿を目の当たりにしたその顔には、更に深い絶望が刻まれた。

「…………そオ…………ツ……………」

コルボーは、血を吐く様な声で呻いた。

自分達の力では、誰かを救うどころか、守る事すら出来ない。

突きつけられた残酷な現実を前に、己の無力を否応なしに認めざるを得なかった。

「フハハハハハッ！ 貴様を始末した後、仲間達も同じ処へ送ってやる！」

興奮気味に嘯いたアステファアルコンが、コルボアの頭を踏みつけていた脚を上げた。踏み砕くつもりだ。

その時だった。神鳥の背後の壁が、轟音と共に吹き飛んだのは。映像の中の観客達がどよめく中、アステファアルコンは振り返って崩れた壁を注視した。

もうもうとたちこめる粉塵。その奥から現れたのは、光の剣持つ紅きレプリロイド——ゼロだった。

アステファアルコンと対峙するゼロ。その脳裏には、先程シエルから聞いたある事実が去来していた。

「親友？」

パンテオンエースを倒したゼロは、直後に入ったシエルの通信に耳を傾けながら先へと進んでいた。

「……ええ、貴方を目覚めさせる為の作戦に参加していたミラン。彼とコルボアの無二の親友——いえ、そんな言葉じゃ表しきれない間柄だったの」

そう言う事か……。その話を聞いたゼロは、何故コルボアが自分に対してあの様な

態度を取っていたのか理解した。ようするに、彼はゼロの覚醒と引き換えにミランが死んだ事を上手く消化出来ていないのだ。

「でも、ね……本当はコルボーだって解ってるのよ。貴方に当たったって仕方ない事くらい。だけど、彼はああいう性格だから……」

長年同じ時を過ごしてきたシエルが言うのなら、そうなのだろう、とゼロは思った。だが、そんな事は関係無い。己のやるべき事はただ一つ。

「シエル。コルボー達は、必ず連れて帰る——だから、待っている」
「うん……」

意識を現実へと引き戻したゼロは、視線を巡らせて周囲の状況を確認した。虚空を漂う映像（ビジョン）。機械が散乱する見えない床とその下の空間。そして——

「アレがミュートスレプリロイド、か」

処刑場の中心に泰然と佇む鳥人型レプリロイドを見据えると、無感情にそう呟いた。一目見ただけで解る。コイツは強い。

「ホウ……まだ仲間が居たのか」アステファルコンが感心した様に嘯く。「だが、誰であろうと私のショウを止める事は——」

言い終わる前に、光の刃が神鳥の身体を捉えていた。

ゼロの放った高速の刺突は、神鳥の残像を確かに貫いていたが、咄嗟にウイング内のブースターを全開にして後退していた本体は、全くの無傷だった。

「お、おのれ！ 口上の最中を狙うとは……卑怯なツ！」アステファアルコンがヒステリックにがなり立てたが、ゼロはそれに答えるつもりは無かった。卑怯だろうが何だろうが、チャンス逃す馬鹿はいない。それに長つたらしい口上をわざわざ聞いてやる道理も無い。

再度敵手の懐へと踏み込んだゼロは、右手の光刃を一閃させた。が、すんでの所で飛翔した神鳥には届かなかった。

すぐさま上方を仰ぐと、アステファアルコンが雷の矢を放つ態勢に入っていた。解放されたコルボーを抱え上げたゼロは、急いでその場から離脱し、オブジェの陰へと滑り込んだ。

直後、大量の雷塊が先程まで立っていた場所に突き刺さった。喰らっていたら間違いくなくやられていただろう。「ククク……とことん愚かだよ、貴様達は」処刑場を飛び回るアステファアルコンが、心底愉快そうに笑った。「力の無い者同士で群れるどころか、あまつさえ役に立たない足手まといをかばおうとするとは……やはり、クズの考える事は理解出来んな」

「クズ、だと……」

オブジェから顔を出したゼロは、アステファルコンにそう問うた。底冷えする低い声で。

「ああ、そうだ。ネオ・アルカディアという絶対の世界から弾き出された奴等などクズでしかない——もつとも、これから文字通りのクズになる貴様らには関係ないがな」

侮蔑でくるんだ言葉を吐いたアステファルコンが、視線を遥か下方に落とした。それを追ったゼロの眼も眼下の空間——もう一つの処刑場へと向けられた。

迫り来る死に対して、恐怖し、絶望に押し潰されようとしているレプリロイド達。その光景を目の当たりにした瞬間、ゼロは己が胸の奥底から何かが沸き上がってくるのを感じた。

「……確かに、貴様の言う通りなのかもしれないな」

「何?」

「アイツらが、この世界にとつての反逆者（イレギュラー）であるのは紛れも無い事実かもしれない。だが——」

防壁として使用していたオブジェから姿を現したゼロ。その姿を目の当たりにしたアステファルコンは、思わず後退った。

今のゼロの佇まいには、ネオ・アルカディアの番人たるミュートスレプリロイドに、その様な行動を取らせてしまう程の強さと恐ろしさが内包されていた。

「だからと言って……命を理不尽に奪って良いハズが無い」
「ツ！ ほ、ほぎけエツ！」

眼前のレプリロイドが放つ威圧感に耐えかねたアステファルコンは、自身のスペックの許す限りの雷の矢を作り出し、一斉に撃ち放った。

一つ一つが破格の威力を持つ雷矢。一発でも喰らえば、命取りになるそれが視界を埋め尽くさんばかりに、紅いレプリロイドへと雪崩れ込んだ。

対するゼロは眉一つ動かさず、セイバー一本でその全てを捌いた。獲物を仕留め損ねた雷の牙は全て後方の壁に突き刺さった。彼はすぐさま跳躍し、鋼の神鳥へと斬りかかった。

例え記憶が無くとも身体が覚えている。戦う術を。そして、魂の奥底から湧き上がるモノが教えてくれる——倒すべき敵を！

翻った光の刃が鋼鉄で形造られた翼を斬り裂いた。

冷たい音を立てて床に落着いた己が一部を見下ろしたアステファルコンは、その猛禽の眼（まなこ）に恐怖の色を滲ませると、本来は補助用であるはずのテイルブースターを全開にして空中へと退避した。

「あ、あれじゃあ届かねえ……」

オブジェの陰からゼロとアステファルコンの戦いを見ていたコルボーが、呻きにも似

た眩きを漏らした。

確かに、飛行能力を持たないゼロでは、今のアステファルコンの下へと辿り着く事はほぼ不可能だ。ここまま手をこまねいていれば、アステファルコンを逃がしてしまうのも時間の問題だろう。作戦全体を鑑みれば、これ以上戦闘を続行する必要は無く、敵を逃がして、こちらでも撤退するという手もある。尤も、その場合はゼロの力を身を持って知ったアステファルコンの情報によって、ネオ・アルカディアは今度こそ本気でレジスタンスを潰しかかるのは確実だ。そうなれば勝ち目は無い。

そうさせない為に、ゼロは跳んだ。だが、いくら英雄と呼ばれるだけの力を持っていても、飛行している敵手を捉える事は出来ない。それならば——『届くまで跳び続ける』だけだ！

「な……!?!」

コルボーとアステファルコンが揃って絶句した。それ位、ゼロの取った行動は常識を逸脱していたのだ。

天空に佇む敵手を追うべく、ゼロは壁面を『蹴り登った』。

信じられない、とでも言いたげな瞳で自分を見つめるアステファルコンを捉えたゼロは、最後に大きく跳躍した。奇妙な浮遊感が身体に纏わりつくのを自覚しながら、ゼットセイバーの柄を両手を把持し、大きく振りかぶった。

狙うは……翼無き鋼の神鳥！

一刀、両断！

ゼロ自身のエネルギーを光刃に収束させた必殺の斬撃——チャージセイバーは、アステファルコンの脳天を砕き、そのまま身体を真つ二つに両断した。

着地したゼロは、おもむろに立ち上がると、未だエネルギーの燦るセイバーを軽く振った。刹那、破壊されたアステファルコンのハイ・エネルギー動力炉がチャージセイバーのエネルギーと反応し、紅蓮を撒き散らしてと共に爆砕した。

言葉が出なかった。いや、出せなかったと言った方が正しいのかもしれない。まるで安い娯楽映画を見ている様な気分だった。それ位、眼の前で繰り広げられた戦いは現実離れしていたのだ。今まで自分達が束になっても敵わなかったミュートスレプリコイドを、いとも簡単に倒してしまった紅のレプリコイド。焔を背にしたその無機質な横顔に、コルボーは戦慄した。

コイツは、本当に百年前の旧式なのか？ ——否、それ以前にコイツは本当に、『俺達と同じレプリコイド』なのか？

そんな事を考えていたコルボーだったが、こちらへと振り向いたゼロと目が合い、我知らず身体をびくつかせた。そして、彼が一步づつ近づいてくる度に叫び声を上げたく

なる衝動に駆られたが、殆どの機能が停止している身にそんな力はもう残されてはいなかった。やがて、ゼロが目の前で立ち止まり、右手を差し出してきたのを見たコルポーは思わず眼を瞑った。

俺は死ぬのか？ まだ、やるべき事があると言うのに。ふと、そんな事を考えたコルポー。いつまで経つても、想定していた瞬間が訪れない事に気付いて、恐る恐る臉を開けた。

「立てるか？」

目の前に差し出されたのは、掌だった。紅の装甲に包まれた無骨なシルエットを有したソレからは、先程まで放っていた圧倒的な威圧感は無く、むしろ正反対の——穏やかな雰囲気微妙かに感じられた。

何故、お前はこんな事が出来るんだ？ 俺が利用しようとしていた事は気付いていたハズだ。それなのに……

そんな俊巡をよそに、ゼロがこちらを見つめている。揺るぎ無い意思に支えられた真つ直ぐな眼差しで。

「下に居る奴等を連れて戻るぞ。アイツが待っている」

それを聞いたコルポーは、ハツ、となった。今、目の前にいるこの男は嫉妬や敵愾心、それどころか名譽、自尊心などで戦っていた訳では無かった。彼は最初から最後まで、

シエルという一人の少女の為に戦っていたのだ。

その事実に至った時、心の奥底で渦巻いていた黒い感情が徐々に霧散してゆくのを知覚した。そして、気付いた時には、差し伸べられた手を強く握りしめていた。

地下の処刑場へと続く道は、意外とすぐに見つかった。入口付近に隠されていた扉の中に、エレベーターのゴンドラが隠されていたのだ。

人間サイズのレプリロイドが約五人程入れるゴンドラへと足を踏み入れたゼロは、先に入っていたコルボーが制御パネルを操作しているのを一瞥すると、エレベーターが動き出すのを待った。暫くすると、奇妙な浮遊感を伴いながらゴンドラが降下を始めた。

戦っている最中は気付かなかったのだが、どうやら地下フロアはおもったよりも深い場所にあるらしく、到着するまでにそれなりの時間を要した。その間、ゴンドラ内に充滿していたのは、重い沈黙。ゼロにとっては、どうということの無い雰囲気だったのだが、コルボーにはいささか辛かったらしく、制御パネルの前で所在無く身体を揺らしていた。

やがて、その空気に耐え切れなくなったコルボーが、粗雑な口調で「なあ」と声をかけて来た。

「さっきは……その……助かったよ。アンタが来てくれなかったら、多分……俺も死ん

でた」

揺れる背中から発せられるたどたどしい言葉。それが彼の精一杯の感謝であり謝罪であるのは、察するまでも無かった。返事の無い事を確認したコルボーが更に続けた。

「それとさ……悪かったな。あの時、アンタをしちまつてよ」

コルボーの言う『あの時』とは、おそらく通用門（ゲート）での戦いの事だろう。ゼ口は、その周辺の記憶（メモリー）を探ってみたが、彼が謝る様な要素は何一つ見つからなかった。だから、「俺は、俺のやるべき事をやっただけだ。お前が謝る必要は無い」と素っ気の無い無機質な口調でそう言った。

それを聞いたコルボーが、暫く黙り込んだ後ケツ、と小さく舌打ちした。

「……やっぱ、イマイチ気に入らねえわ、アンタの事」

傷だらけの背中から発せられた言葉には、彼特有のふてぶてしさが戻っていたが、それ以上に、過剰な程に攻撃的だった刺々しさが幾分か和らいでいた。

「……口……ゼ……ゼ口、聞こえる？」

シエルからの通信が入ったのは、エレベーターを降りてすぐの事だった。ノイズの向こうから聞こえてくる声には、どこか切羽詰った感情が滲み出ている。

「ごめんなさい、その周辺にジャミングがかけられていたみたいで……」

「どうやら、シエルは先程の戦いのサポートが出来なかった事を悔いているようだ。だが、それは彼女のせいではない。ましてや責任を感じる必要は一切無いのだ。にも関わらず、真正面から受け止めるその姿は美徳とも言えるかもしれないが、それで潰れてしまつては元も子も無い。」

「問題は無い——お前はよくやった」

〈えっ?〉

「それよりも、たった今要救助者を救出した。どうすれば良い?」

〈あ、えつと……わ、わかつたわ、すぐに救護班を向かわせるからそれまで待機していて「了解」

通信が終了し、ヘルメット内の通信機が停止したのを確認したゼロは、喜びに浸るレプリロイド達へと視線を向けた。

誰も彼もが生きていることを喜んでいる。つい先程まで絶望に囚われていたにも関わらず。

——諦めない限り、命に本当の死は訪れないんだ。

「——ツ!?!」

不意に、記憶の海の底からその言葉が浮かんできた。まるで、遠い昔に誰かから聞いたような……

か細い記憶の糸を必死に手繰り寄せたが、核心へと至る前にそれは霧散してしまった。これ以上は徒労に終わると判断したゼロは、頭に添えていた掌を下ろした。「エックス……？」

救護班が到着したのは、それから暫くしての事だった。

太陽無き蒼穹。無限とも思える空間に一人佇む彼は、己が精神を拡散させていた。腕や手などを越えて際限なく伸ばされた不可視の指は、遙か彼方に広がる空の情景を余すところ無く教えてくれていた。吹き抜ける風の音、流れ、そして臭い。周りを取り巻く全てが手に取る様に解る。だからこそ、僅かに生じた揺らぎすらも感じ取る事が出来た。

閉じられていた瞳が見開かれた刹那、彼は両の腕（かいな）を翻した。掌の中の光刃が、その軌道に沿ってX字状の斬波を飛ばした。蒼色の大気を切り裂いて走る紅の刃は亜音速のスピードで駆け抜けると、果てなく広がる穹の彼方へと消えていった。

その直後、周囲の景色に同化していた『デコイ』の成れの果てがその姿を晒した。

二振りのセイバーを腰部に隠されたウエポックラックへと収納した彼は、緑色の長髪から覗くひどく無感動な瞳で、それを見つめていた。

へフフ……相変わらず凄いいモンねえ

背後から聞き覚えのある女の声があった。振り返ってみれば案の定、良く見知った顔の立体映像（ホログラフ）が佇んでいた。

「……レヴィアタン、か」彼は抑揚の無い口調でそう言った後、直ぐに眉を顰めた。

「何だ？ その格好は」

「何って……仕方無いじゃない。こうしないと『感知』が出来ないんだから」

ホログラフの女——レヴィアタンは、何も身に着けていない。これは、彼女の能力に関係するのだが、どうにも慣れない。

当の本人は恥らうどころか、濡れた髪と肢体を自慢げに見せ付けている。正直、鬱陶しい。

正直なトコロ、彼女の能力上仕方が無いとは言え、そんな格好で人前に出られては目障りではないのだ。

「だとしても、そんなみつともない格好を晒すな。四天王の一人ともあろう者が」
「わかってるわよ、そんなの」

口を尖らせ、そつぽを向いたレヴィアタンは「カタすぎんよ、全く」と漏らした。貴様が適當すぎるんだ、と口中で呟きながら、彼は全く別の言葉を紡ぎ出した。

「ところで、何の用だ？ まさか、本当にそれだけではあるまい」

それを聞いたレヴィアタンが、妖しく笑った。この女がこういう表情（かお）をする時は決まって面倒な事が起こる。湧き上がる嫌な予感に辟易しつつも、彼女が話し出すのを待った。「アステファルコンが倒されたわ」

名前に似合わぬ端正な顔に嬌笑を貼り付けたレヴィアタンは、楽しそうにそう言った。

そこまで聞いた彼は、正直拍子抜けしていた。その程度の情報ならば、既にこちらで掴んでいる。勿体ぶって話すものだから何事かと思つたが、わざわざ聞くまでも無かつた。返事を返そうと口を開きかけた刹那、眼前の女がその事を承知していないハズが無い事に気付き、急遽全く別の言葉に差し替えた。

「そうか……それで？」

「知ってるだろうけど、彼、事あるごとに変な催しを開いていたみたいなのよね」

それなら以前聞いた覚えがある。何でも、捕らえたイレギュラーの処刑を見世物にしているらしいが、それ以上詳しい事は把握していない。職務を全うさえしていれば、別に口を出すつもりも無かつたし、何より部下の行動をいちいち把握出来る程、器用では無かつたのだ。

「で、今回もソレをやってたんだけど、その観客の一人が言つてたわ。『アステファルコンを倒したのは、紅い金髪のレプリロイドだった』って」

「紅……金髪……!？」

その二つの単語を取り込んだ電子頭脳がある一つの名前を弾き出した。が、彼はすぐさま、それを取り消した。あり得ない。『アレ』が目覚めているハズが無い。ましてや、我らに仇成すなど……

へおうおう！　なんだか面白そうな事でもりあがつてんじゃねえか？　彼らの間に割つて入る様に、粗野な男の声が蒼穹の空間に響き渡った。「俺様も混ぜてくれよ、なア？」
レヴィアタンの反対側に出現したのは、ネオ・アルカディア陸軍の略装軍服に身を包んだ男の立体映像だった。彼等に挟まれる形となったハルピユイアは、更に気が重くなつた。

「ファープニル……」

軍服姿の男——ファープニルが焰の様に逆立った赤髪の下に据えられた貌（かんばせ）を無邪気な笑みの形に歪めた。一見すれば、一兵卒にも見えるが、彼もまたネオ・アルカディア四天王に名を連ねる闘將だ。尤も、常時は式典用の軍装を着用している他の四天王と並ぶ光景は、滑稽でしか無いが。

へで、一体何の話してたんだよ？

鼻息荒く、ファープニルが迫る。この男の暑苦しさは相変わらずだ。相手がホログラムだと言う事を、一瞬忘れそうになる。

〈ボーヤの部下がやられちゃったのよ〉

レヴィアタンが素っ気無く言った。

振り返ったファアーブニルは、彼女の姿を見るや怪しいモノでも見るかの様に眼を細めた。

〈何てカツコしてんだよ、お前……〉

〈……うっさいわね〉

既視感のあるやり取りを見て彼は嘆息した。時々、彼等が自分と同列である事を失念しそうになる。

〈オイ！ コイツの言った事は本当なのか!?!〉

「……ああ」

〈マジかよ!?! ミュートスレプリロイドを倒すなんてなア……レジスタンスもやるじゃねえかよ!?!〉

敵の奮闘を喜ぶファアーブニルバトルマニアの戦闘狂ぶりに、彼は一瞬苦い表情を浮かべたものの、直ぐにいつもの鉄面皮を取り戻し、補足を加えた。

「奴は、我が裂空軍団の中でも下位のハンターだ。いつかは、こうなると想定していた」
ファアーブニルが「ドライだなあ、オイ」と呟き、背後でレヴィアタンが肩をすくめる気配がした。

四天王直属でありながら、自らを過信し、無様に敗北する者の事など気にかける必要は無い。

所詮は、その程度だった、と言うだけの話だ。

「当然の話だ……ところで、レヴィアタン。例の遺跡の方は？」

「冥海軍団（ウチ）から調査隊を向かわせたわ。流石はドクター・シエル……つて、言いたいけど随分荒っぽい方法で最深部の封印を解いてたわよ、彼女」

レヴィアタンの口調が変わった。先程と比べて、まるで別人の様に極めて硬質だった。普段、どんなにぶざけていようと、有事の際には指揮官として適切な振る舞いを行える切り替えの早さ、それこそ彼女達がネオ・アルカディアの軍部を預かる四天王と呼ばれる所以の一つであった。

「そうか……それで中には？」

「なあくんにも。中は見事な位にもぬけの殻。でも『何か』あったのは確かだね」

「……どういう事だ？」

「言った通りの意味よ」

レヴィアタンの報告を聞いた彼は、脳裏に浮かんでいた名前が形を成してゆくのを知覚した。レジスタンス共がああ遺跡を訪れていたと聞いて、まさか、と思ったが、もしも、アステファアルコンを倒したの本当に、が自分の知っているレあのプリロイドだとす

れば……

精神の内奥から頭をもたげる動揺を、出来る限り押し留めると、無感情な口調でレヴィアタンに命令を下した。

「引き続き調査を続行しろ。新たに何が見つかるかもしれん」

「了解」

短く、それでいて明瞭にそう返したレヴィアタン。その直後、彼女のホログラムが穹の空間から消失した。それを見届けた彼は、次にファープニルの方へと振り返った。

「ファープニル。近いうちに、貴様の塵炎軍団の力が必要になるかもしれん。いつそんなっても良い様に備えておけ」

「オウ！ 任せておけ！」

牙を剥き出しにして笑うファープニル。彼がこういう表情を浮かべた時は、決まって精神が昂っている時だ。早く力の捌け口を見つけてやらねば後々面倒になる。

ファープニルのホログラムが消えるのを見届けた彼は、踵を返して歩き出した。二、三步ほど進んだ所で立ち止まり、虚空に指を滑らせる。すると、眼前の空間が矩形に切り取られた。蒼穹の真ん中にぽっかりと開いた穴の奥に広がっているのは、暗灰色の壁面に覆われた通路だ。

彼は戸惑う事無く其処を潜った。その瞬間、彼の唇から「……敵が誰であろうと関係

ない。俺達は使命を果たす……ただ、それだけだ」と硬質な言う言葉が紡がれた。それは、ネオ・アルカディアの守護者たる四天王の一人——裂空将軍ハルピユアの矜持と誇りそのものだった。

直後、周囲の景色が一変し、仮想空間訓練室（シミュレーションルーム）が、暗灰色の壁面に塗り固められた本来の姿へと戻った。

救出作戦終了から一夜明け、野戦病院さながらの様相を呈していたレジスタンスベースに漸く平穩が訪れつつあった。

メデイカルルームに収容しきれなかった負傷者を運び込んだレクリエーションルームの片隅で、ゼロは未だせわしなく動き回る看護スタッフ達を眺めていた。

救出されたレプリロイド達の中には、衰弱が激しく、未だ予断を許さぬ状態の者も多かった。その為、シエルを始めとした医療スタッフは今も休み無く働き続けている。

因みに、ゼロもメンテナンスを受けるように勧められたが、特に異常は感じられなかったので断った。

暫くの間、レクリエーションルームに渦巻く人の流れを眺めていたゼロは、下方から自分を見上げている瞳があることに気付いた。視線を下ろすと、金属とオイルの充満するこの空間におよそ似合わぬ小さな少女型のレプリロイドの姿が映った。人間で言え

ば、八、九才ほどだろうか、シエルと同じハニーブロンドの髪を持つ幼い少女型のレプリロイドが、無垢な輝きを孕んだ瞳でこちらを見つめている。

「あなたは誰？」

少女に、ゼロは無表情のまま「……ゼロだ」と答えた。

「ゼロ……もしかして、シエルお姉ちゃんの言つてたゼロ？」

「多分、な」

正直、いい加減だと思つたが、自分でも解らないのだから仕方が無い。それに否定するにしても、そう出来るだけの記憶すらも無いのだ。

「そうなんだ……私はアルエット。よろしくね、ゼロ」

眩しいくらい無垢な笑顔を向けるアルエットと名乗る少女は、抱えていた白い猫のぬいぐるみをぐい、と突き出した。

「コレはシエルお姉ちゃんが作つてくれたぬいぐるみ。『ブランシュ』つて言うの」

満面の笑みで告げるアルエット。本来は白かったであろうその『ブランシュ』なるぬいぐるみは、様々な汚れが染み付いていてお世辞にも綺麗とは言えない。が、大切にされていたであろうソレの面持ちは、心なしか穏やかなモノに見えた。

こういう時は、気の利いた誉め言葉などを用意しておくモノなのだろうが、生憎とそういう事には疎いゼロは「そうか」としか言えなかつた。

「そういうえば、ゼロは此処で何をしていたの?」

小首を傾げたアルエットが、そう訊ねてきた。今や病室同然のレクリエーションルームに、医療スタッフでもない者が居る事に疑問を感じたのだろう。彼女の問いに、ゼロは問いで返した。それこそが、彼が此処に来た目的でもあった。

「……一つ、聞いてもいいか?」

レジスタンスベース最下層フロア。その最深部に今は誰も近づこうとしない部屋があった。最低限の照明しか灯されていない空間には、いくつもの黒い袋が並べられていた。その中の一つに、コルボーは辛い痛みを耐えているかの様な眼差しを向けていた。並ぶ袋の中に入っているのは、今回の作戦で戦死したレプリロイド達の亡骸だ。

レプリロイドには死者を弔うと言う概念は無い。当然だ。科学の究極の産物たる彼らは存在自体が理屈の塊なのだから、そんな迷信めいた事を信じるなどありえない。だが、その事実がどうしようもなく悔しかった。

何故、自分はレプリロイドに生まれてしまったのだろうか? でなければ、彼らを弔う事だつて出来ただろうに。

そう自問してみたが、それは結局、己の傷を抉るだけで、求めた答えを得ることは出来なかつた。

その時だ。この部屋と外の廊下を繋ぐ扉が耳障りな音を立てて開いたのは。

廊下から漏れる光が薄暗い空間に差し込み、闇に慣れていた視覚センサーが一瞬麻痺した。ぼやけた視界の向こう側に見覚えのある人影があることに気付いたコルボーは、思いついた名前を口に出した。

「ゼロ……？」

開け放たれた扉の前に立っていたのは、紅のアーマーを身に纏ったレプリロイド——ゼロだった。彼は無表情を貼り付けたまま安置所に足を踏み入れると、そのままコルボーの横を通り過ぎ、一番奥の列に並ぶ一つの亡骸の前に経った。袋に括りつけられたプレートには『Milan』と刻まれていた。

「……ココで何をしていた？」

ゼロがミランの亡骸を注視したまま訊ねてきた。あっけに取られていたコルボーはその言葉で我に返り、慌てて取り繕った口調で「大した事じゃねえよ」と答えた。「ただ……俺の決意って奴を聞いておいて欲しかったんだよ」

そう。決意だ。いずれバラバラに分解されて生きている者の為の予備パーツとなってしまう前に聞いて欲しかった。今までの戦いを忘れない為に。そして、これからの戦いを生き残る為に。

「そういうアンタは何しにココへ？」

照れ隠しという訳では無いが、なんとなく今の心境を悟られたくなかった。だから、いつまで続くかは自信無いが、出来るだけフランクな口調を装う事に勤めた。

「アルエット、と言ったか——そいつにココの場所を教えてもらった」

アイツ……余計な事を。

レジスタンスのマスコットの存在である少女の無邪気な笑顔を思いだして怒りが込み上げてきたが、彼女に悪気が無い事は解っていたから、それ以上は考えない事にした。回る思考を強制的に停止したコルボーは、ミランの亡骸を見つめ続けるゼロへと視線を戻した。

「シエルから聞いた。彼とお前は親友同士だったらしいな」

眼差しを揺らす事無く、ゼロが言ってきた。

どいつもコイツも……

アルエットならまだしも、シエルまでもがゼロに余計な事を吹き込んだ事実を知ったコルボーは、今度こそ己の感情をしまいきる事が出来なかった。

確かにミランとは親友同士だった。共に死線をくぐり抜け、何度も絆を確かめ合った。だが、彼は死んだ。『伝説の紅き英雄』を復活させる為に。

電子頭脳が過熱気味だった時ならともかく、今はその事でゼロを恨むつもりは無かった。

「彼のおかげで、俺は目覚める事が出来たらしい」

「……みたいだな」

半ば自己嫌悪に陥っていたコルボーは、それを悟られまいと素っ気なく答えた。

「彼——ミランがどういふ男だったかは知らない。だが、その命が俺を目覚めさせたのならば……俺はそれに報いなければならぬ」

感情を一切感じさせない平坦な声。しかし、その奥に、何者にも揺るがぬ固い決意が燃えている様に思えた。

「ハハッ……」

思わず笑いが零れた。コイツは最初（はな）っからそうだった。つまらぬ意地に囚われていた自分とは違って、いつでもシエルの為に戦っていたのだ。

「何言ってるんだよ。そうしてもらわなきゃ困るんだよ。でなきゃ、命懸けでアンタを復活させた意味がねえだろうがよ」

ゼロのすぐ側に歩み寄ったコルボーは、思ったよりも逞しい背中を思い切り叩くと、面を食らった鉄面皮に向けて満面の笑みを向けた。

彼の想いに触れる事の出来たのなら、今からでも遅くは無いはずだ。

「これから宜しく頼むぜ、英雄——いいや、ゼロ！」

「……ああ」

これから先、自分達を待っているのは、過酷な戦いだろう。その中でたくさんの同胞が命を落とすだろう。もしかしたら、己自身がそうなるかもしれない。だが……それで戦い続ける事を改めて誓おう。つまらぬ虚栄心などでは無い。

去っていった者達が見た未来。そして、生きている者達の目指す未来の為に……。

F I N

第参話 Lost Memory (追憶)

酷く現実感の無い光景だった。

荒廃しきつた大地が何処までも広がり、空は厚い雲によって閉ざされている。

『星』の落下から始まる天変地異により、地上から命の息吹が消え失せた地球^{ほし}。

そんな閉ざされた絶望の世界に、『彼等』は佇んでいた。

「此処も駄目、か」

切り立った崖の上から砂漠化した地上を見下ろして、呟く。

一面の砂海。眼前のの惨状に辟易せざるを得なかった。

『グラウンド・ゼロ』を中心に、荒廃が進んでいる。この一帯が完全に死ぬのも——時間の問題か。

口の中で呟いて、忌々しげに舌打した。この現象を引き起こしたのも、元はと云えば……

「そつちはどうだった？」

思考が深みに嵌るのを防ぐかのように掛けられた声を受け取って、振り返る。

苦も無く崖を上ってきたのは、蒼いアーマーを纏ったレプリロイドだった。

此方を見るや、青いレプリロイドは意外そうにヒトを模した眼を丸くして「どうしたんだ？」と問うた。

「君が俺の気配に気付かないなんて……珍しい事もあるんだな」

浮かべる微笑はとても穏やかで、この男が戦闘用レプリロイドだと云う事を、そして幾度と無く世界を救った『英雄』である事を忘れそうになる。

それほど迄に、彼の纏う雰囲気は柔らかかった。しかし、それは美点であると同時に弱点でもあった。

優しすぎる気質は、幾度と無く彼を苦しめ、絶望の底へと叩き落した。時には、優しさを捨て去ってしまった事さえあった。

だが、最後には必ずその優しさが勝利へと導いた。否、それは既に優しさを越えたモノだったのかもしれない。云うならば――

「俺を何だと思っている」

「すまない、悪かった」

「……ところで、そっちの方はどうだった？」

青いレプリロイドは、悲痛な表情で沈黙した。それは何よりも雄弁な答えだった。わかっていた事だ。この地にはもう何も残されていない。最早、死を待つだけだ。

それもこれも全て——

「君のせいじゃない」

彼の思考を読んだのか、男はそう云った。

「あの時、君は『ΣV』に魅入られていた。あれは君の意思じゃない！」

「だが、俺がもつと強ければ……あんなモノに翻弄される事は無かった。全ては——俺の弱さが招いた事だ」

搾り出す様に吐き出して、彼は拳を軋む程に握り締めた。遣り場の無い悔しさが込み上げる。

「……この戦争が終わったら、君はまた眠りにつくのか？」

彼の横に並び立った男が、問うた。

「そのつもりだ」

「決心は、変わらないんだね」

答えられなかった。しかし、それで彼は全てを察し、決心した様に云った。

「なら、俺は『種』を蒔くよ」

「種？」

「ああ、平和な世界に咲き誇る——そんな花の種を、ね」

彼は、笑った。凡そレプリロイドらしくないロマンチズム。だが、同時に彼らしい

とも思う。

「そいつはいい。楽しみが増えた」

「それは、良かった」

男の浮かべた穏やかな笑みに、幾分か救われた気分だった。

深遠へと続く長い長い闇は、まるで眠りに就く前の睡みの様に思える。そうであるならば、最も深き深淵に在るのは果たして、『心』が見せる記憶の残滓、即ち——『夢』なのだろうか。

「——ゼロだ。これよりミツシヨンを開始する」

壁伝いに降りてゆくゼロは、眼下に広がる闇に己自身を見た気がした。空っぽの記憶——足元すら覚束無い暗がりを否応無く想起させるソレをゼロは嫌悪していた。

——そんなモノがレプリロイドに存在するなら——を一片残さず貪り尽くして行く。だからゼロは、レジスタンスに身を寄せてから眠る事を極力厭うていた。睡眠は、闇

に良く似ているからだ。

「シエル——聞いていいか？」

『どうしたの?』

この様な状況で、通信機の向こう側に居るシエルの存在は、何よりも救いだった。

「……人間以外の生物も、夢を見る事は出来るのか?」

ヘルメット越しに、動揺の気配を感じた。

『え、ええ。専門外だから詳しい事は解らないけど、可能性はあると云われているわ』

「なら、レプリロイドも夢を——見るのか?」

可能性があるならば、人間に極めて近い存在であるレプリロイドも夢を見るはず。そう思っただけは聞きた。

『ん……理屈の上では、ね。でも、人間と違ってレプリロイドの頭脳はそういう風には出来て無いのよ』

「そう、なのか」

矢張り、思い過ぎだったのか。だとすれば……あのビジョンは一体何だったのだろうか?」

『何でそんな事を?』

「何でもない。忘れてくれ」

どうせ電子頭脳のノイズだろう。

余計な事に気を揉む暇があるなら、今は眼の前の事に専念すべきだ。

そう断じたゼロは、異界へと続く闇の底を見据えた。

その地は、かつて脱出した時のままだった。

朽ち果てた内壁。死に絶えた機械類。そして、それらを包む冷たい闇。何もかもが、あの時のまま。

ゼロは、己の目覚めた地に帰ってきていた。

「こちらゼロ。レジスタンスベース、聞こえるか？」

ヘルメットに手を当て、通信機に吹き込んだ。

『こちらレジスタンスベース。聞こえているわ、ゼロ』

「了解した、これよりミッションを開始する」

淡々と言つて、ゼロは周囲を警戒しながら歩き始めた。

その途上、ゼロは今回のミッションの概要を頭の中に呼び出していた。

脱出時に取り損ねたゼロに関するデータを可能な限り回収し、持ち帰る——それが、今回のミッションの目的。

続いて装備の確認。主武装であるゼットセイバーは大腿部の格納スペースに。バスターショットは腰のホルスターに。そして、今回のミッション用に増設されたポーチに収納した記録装置（メモリ）。出撃前にシエル付きの隊員から渡された物だ。彼曰く、使

い捨てだが、性能は一級品らしい。

ふと、ゼロはこのミッションを引き受けた時の事を思い出していた。

メモリを託したシエルは、揺れる瞳でゼロを見ていた。

それは、言葉に表す事の出来ない感情が混沌として発露した証だった。

「ごめんさい。本当は、私も行くべきだったのに……」

俯く少女が、絞り出すように云う。ゼロは悟った。彼女が、未だ罪悪感に縛られている事に。

無謀としか云い様の無い賭けで、あの地で多くの同胞が散った。それに見合うだけの価値があったとは云え、犠牲になった者達がいたと云う事実は消えない。

少女は、それをたった一人で背負おい込もうとしている。贖罪、と呼ぶには余りにも重過ぎる荷を。

だが、それでもシエルという少女は、決して歩みを止めないだろう。

また、そんな彼女を、レジスタンス達は支え続けるだろう。

ならば、ゼロが取るべき行動は……

研究所は、パンテオンで溢れ返っていた。

神々にかしづく兵士を模した機械生命達は、紅に輝く単眼を光らせて辺りを徘徊している。

レプリロイドとは云え、簡略化された彼らの電子頭脳は、それほど精巧では無い。故に、人間や普通のレプリロイドが『肌』で感じ取れるモノが彼らには感じ取れない。

だから、気付かなかった。

吹き抜ける……紅の風の正体に。

風に引き連れて閃く光刃がパンテオン達を、切り裂いてゆく。突如現れた襲撃者に対し、生き残ったパンテオン達は体勢を立て直して一斉にバスターを向けた。

間断無く襲い来る兵隊達を、次々と切り伏せてゆく襲撃者——ゼロだったが、その物量の前に次第に後退を余儀無くされていた。

鉄兜の下で顔を顰めた紅の戦士は、バスターで弾幕を張りながら、視線を周囲に巡らせる。だが、状況を覆す様なモノはあるはずも無く、結局壁際まで追い詰められてしまった。

どうする？

ゼロは、自問した。強行突破するだけなら、別に難しくは無い。が、その時はこちらもタダでは済まない。この先の事を考えれば、損耗は出来るだけ抑えたい。しかし、このままでは埒が明かない……

「——こつちだー！」

覚悟を決めようとしていたゼロの聴覚センサが、繊細そうな声（アルト）を拾った。すぐさま振り返ったゼロは、背を凭れている壁の一隅に小さな穴を見つけた。老朽化の末に崩壊したのだろうか。

その穴は、ゼロの体格ならばギリギリ通れるか、と云ったモノだった。

——迷つてる暇は無い、か

一瞬正面を警したゼロは、壁に張り付いたまま穴目掛けて跳んだ。飛び込む瞬間、天井をバスターで撃つて瓦礫を落とし、入り口を塞いだ。これで時間稼ぎにはなるだろう。

狭い穴倉が続くと思っていたが、その予想は良い意味で裏切られた。飛び込んだ先は、広い空洞になっていたのだ。

一息ついてから、ゼロは周囲を見回した。思ったより広い空間で、それほど荒れ果てていない。シエルターの類だろうか？

油断無く周囲に警戒の視線を飛ばしていたゼロは、視界の端に蹲った影を見つけて、すぐさまバスターショットを向けた。闇に眼が慣れて来る頃には、それがヒトの形をしていると気付く。

其処に居るのは、まだ年端も行かぬであろう少年だった。シエルとそれほど変わらな

い様に見える。

穏やかな笑みの少年は、青い僧服を纏っていた。ただ僧職にしてはいささか若すぎるが。

「災難、だったね」

繊細なアルト——その声に、聞き覚えがあつた。

そうだ。あの時、俺を導いた——

「お前は？」

「僕は……そうだね。しがない見習い神父、ってどこかな？」

聞けば、この近くの寺院に住み込んでいるらしい。なんでも、好奇心のままに迷い込み、パンテオン共に見つかった挙句、こんなトコロに隠れる羽目になったらしい。

「ついてないね、全く」

そう言いつつも、少年はどこか楽しげな笑みを浮かべていた。が、ゼロはその奥に老成した何かの存在を感じ取っていた。

バスターを仕舞い、もう一度辺りを見回したゼロは、この空間に出入り口が無い事に気づいた。

「此処はね、遥か昔に造られたシエルター……の残骸なんだ」

少年曰く、この研究所は色々後ろ暗い研究をしていたらしく、あの様な有様になった

のも、研究絡みの『事故』によるものらしい。色々ときな臭いモノを感じるが、どうでも良い。今成すべきは、一刻も早く此処から抜け出し、ミッションを再開する事だ。

「それで、どうするんだい？　これから」

床に寝そべっていた少年が、気怠げに問うた。

解りきった事だ。「此処から出る」云つてから、ゼロは四方の壁を探った。入ってきた方の穴はもう通れない。となれば、本来の出入り口を見つけなければならぬ。

「出入り口を探そうとしても無駄だよ」

「何？」

「随分前に機能が死んでるらしくてね。コンソールを叩いても反応しやしない」

少年が視線を飛ばした先に、壁面に埋め込まれたコンパネがあった。が、作動している形跡は無かった。

「だけど、抜け道はある……」思わず振り返ったゼロに、少年は意地悪そうな笑みを向けた。「知りたい？」

ゼロは、答えなかった。が、それを返答と受け取った少年は、立ち上がって壁際の葉品棚に歩み寄った。応急処置などに使うのであろう薬壇をぎつちりと詰め込んだ棚は、一見重そうに見える。しかし、細身の少年が少し力を入れて押しただけで簡単にスライドした。

「これは……」

「所謂、隠し通路——って奴だね」

最前まで柵のあった場所には、ありつただけの闇を押し込めたかの様な昏い穴があった。

抜け道は思ったより短い様に思えた。冷静に考えれば研究所の外に出る為の道では無いので、当たり前前の事だった。

前を進んでいた少年が何かに気づいた様に顔を上げる。そして、俄に走り出した。

多少狭苦しいとは言え、少年の背中とはそこまで離れていない筈だった。が、どうい
う訳か全然追いつけない。

やがて青い僧服は闇に飲まれて見えなくなつた。

此処で見失つては面倒だ……

急ぎ足で追うゼロ。そして、気付くと広大な空間に迷い込んでいた。

実験施設だろうか。床をくり貫いたであろう大穴には空の培養槽が並んでいる。

「百年前……此処ではイレギュラーの研究をしていた」

硬質な響きを孕んだ少年の声が、辺りに反響して響き渡つた。見ると、大穴の両端を繋ぐ橋の上に僧服の少年が佇んでいる。

朽ちかけた培養槽を見下ろす眼差しは、深い悲しみを湛えている様に見える。

「イレギュラー化のメカニズムを解明する為にありとあらゆる実験が繰り返されていたんだ。時にはレプリロイドを使って……。相当酷いものだった——らしいよ」

暗い表情で少年が続ける。まるで実際にその光景を見てきたかの様だった。

ゼロは少年の視線を追った。

あの培養槽には何が入れられていたのだろうか。少年の言う事を信じるのなら、ロクでもないモノが入っていたのだろう。

「イレギュラー戦争が終わった後、実験の内容が漏れる事を恐れた誰かが研究所を閉鎖した。犠牲になったレプリロイドの怨念を封じ込めた上で、ね」

「怨念？」

「おかしいよね、レプリロイドが怨念なんて」

どこか泣き出しそうな歪な笑みを浮かべながら、少年が言う。

「どんなに人間に近くともレプリロイドは機械——プログラムに従って行動するロボットでしかなかった。でも……いつしか、そうじゃなくなった」

ゼロと少年の眼差しが交わる。

「人がそうである様に、レプリロイドも進化する。より有機的になっていくDNAデータ。サイバーエルフに至ってはまるで魂だ」

ゼロにも、少年が言わんとしている事が解った。

そこまで至ったレプリロイドは最早、人間の複製ではない——此の星に生きるれつきとした生命体だ。

「そうだとすれば、怨念つて言う話も納得できるかもしれない」

「——何故、俺にそんな話を？」

「ん……何で、だろうね？」

その時の少年が酷く倦げに見えたゼロは、ほんの少しだけ視線を逸らした。それから再び正面を見ると、いつの間にか少年の姿が消えていた。

少年の生硬い声の残響が、聴覚センサにいつまでも残っていた。

少年を見失ったゼロは、あれから辺りを探してみた。

その間中、少年の語った話が耳から離れず、収支苛立ちを覚えずにいられなかった。結局見つけ出す事は出来ず、仕方無く少年が消えた場所から先に進んだ。

外の通路は広い一本道だった。真つ直ぐ進むと、突き当たりに大きな穴が見えた。元からあったモノではなく、後から破壊された跡の様だった。

視覚センサを凝らして穴を覗き込と、遙か下方に通路が確認出来た。

飛び降りるのに躊躇は無かった。

降りた先の空間に、ゼロは軽い既視感を覚えた。見覚えのある広い通路——そうだ。シエルによって封印を解かれた日、此処を通り抜けたのだ。と、云う事は……

未だ脳裏に焼き付いている記憶に従って、ゼロは通路を走った。

十分ほど走った所でゼロは足を止めた。見上げた先には開け放たれた巨大な鉄扉。良く覚えている。

——此処は、俺が封印されていた部屋だ。

ゼロは、油断無く辺りを見回した。前はじっくり観察している余裕は無かったが、今はよく解る。

——こんな所に、百年も居たのか。

大小様々なパイプが壁と天井を這い摺り回る寒々しい空間は、見る者の心に冷たい塊を投げつける。

言い知れぬ震えが、内奥から湧き上がってくる。

かつて公には出来ない研究を行っていた此の地に、百年という決して短くない長き眠りについていたゼロと呼ばれたレプリロイド。レジスタンスが来なければ、目覚める事のなかった筈の古の英雄。

本当は——目覚めてはいけなかったのではないか？

頭をもたげた疑問が毒になって全身に回ってゆくのを感じたゼロは、早急に思考を切

り替えて任務に取り掛かる事にした。

——悩むなんて……まるでアイツみたいだ。

生きている端末を探しながら、心中で独白したゼロは自分の事をいよいよ信じられなくなりそうになった。

アイツとは——誰だ。

何処から来たのか、何者かの影が脳裏を掠める。

失った記憶に関係しているのか、それすらも解らない。改めて自分という存在の不確かさを思いしつたゼロは、一刻も早く任務を終えようと端末探しを急いだ。

その時だった。ゼロの直感が何かを捉えたのは……

端末の背後、パイプと同化して冷たい空気を隠れ蓑にしていたのは……

「むウ……？　誰でおじやるか」

パイプの蔦にその身を埋めた巨大な『球体』が、微かに身動きした。

「成る程……そちがゼロでおじやるか」

球体の頂が、気怠げに蠢く。

「俺を、知っているのか？」

頂点——象に酷似した頭部から、甲高く耳障りな音声が発せられた。

「ほっほっほ、驚く事は無い。まる——マハ・ガネシャリフに知らぬモノは無いでおじや

る」

「ミュートスレプリロイドか？」

「いかにも。冥海軍団所属、鉄球大魔神マハ・ガネシヤリフとはまるの事でおじやる」

ヒンドゥー教の神を模したミュートスレプリロイドが、全身に絡みつくパイプを引き千切りながら一歩踏み出した。

「レジスタンスが、百年前の英雄を飼っていると聞いた時は、どんな猛々しい姿かと想像したでおじやるが——」喉のスピーカーをくつくつと鳴らし、巨体を揺らした。「この様な小兵とは……少々期待外れでおじやるな」

嘲る敵手に関心の無い眼を向けながら、ゼロは、セイバーを抜いた。ネオ・アルカディア相手に事が穏便に運ぶ筈も無い。ならば、やる事は決まっている。

「ぬ!?」物騒でおじやるな。これだから戦闘用は……」

ガネシヤリフが、おどけた様に肩を竦めた。こちらを油断させる気か？

ゼロは、セイバーを構えてガネシヤリフを注視した。

「……冗談も通じぬでおじやるか……。やりにくいの」

仕方無い、とでも云いたげに頭を振り、右手を前方に翳した。

重厚な金属に覆われた掌に映像が浮かび上がる——立体映像だ。映し出されているのは……

「それは——」

「そう。そちのデータでおじやる」

目まぐるしく移り変わる映像には、度々レプリロイドの設計データが映され、それが自身に良く似ている事からゼロはそれが目当ての品だと確信した。

つまり、先程の異様な姿はデータの回収作業の最中だったか。

と、云う事は——

「残念。そっちはもう空でおじやる」

振り返ると、端末にエラーメッセージが表示されていた。

「とんだ無駄足だったの。どうしても欲しいのなら、まるを倒し——」

得意げなガネシャリフの語りは、彼の重装甲が弾いた光弾によって遮られた。ゼロが、ガネシャリフ目掛けてバスターを放ったのだ。

「……何のつもりでおじやるか？」

「要は、貴様を倒せば良いんだらう？ その後で、腹の中に在るデータを回収すれば良い。なら——簡単だ」

セイバーを構え直したゼロは苦悩の影を振り切り、鬨志漲る眼差しを眼前の敵手に向けた。

それを見たガネシャリフが、愉快そうに笑う。

「戯言を……押し潰してやるでおじやるッ！」

振り被った右腕が、勢い良く振り下ろされた。地響きを上げて、大地を砕く。

脚部に内蔵された緊急加速システムを使ってそれを回避したゼロは、そのまま跳躍してガネシヤリフの眼前に躍り出た。

たとえ胴体が強固だとしても頭部ばかりはそうでは無いと踏んだゼロは、セイバーを握る手に力を込め、勝利を確信した。が――

「ぬんッ！」

気合を込めて、ガネシヤリフが唸った。直後、存在を主張していた二本の牙が猛烈な回転と共に放たれた。

弧を描いて左右から迫る牙。ゼロはセイバーからバスターに持ち替えて、撃ち落そうとトリガーを続けざまに引いた。しかし、回転によって勢いの付いた牙を止めるには、バスターのノーマルショットはあまりにも力不足であった。

「――ッ！」

このままでは駄目だと断じたゼロはバスターをチャージした。

僅かだが、時間差で迫り来る牙の軌道を見切ったゼロは、身体を反らせて一撃目をかわし、二撃目に向けてフルチャージバスターを放った。

黒鉄の銃口から放たれた鮮緑の光弾が回転する牙と衝突し、周囲に激しい火花を撒き

散らした。

「甘いッ！」

ガネシャリフが吼えた！

拮抗していた光弾と牙だったが、牙の回転の勢いの強さに光弾は徐々に押され、遂には押し切られてしまった。

残光を帯びて飛来する牙。相対するゼロに——迷いは、無い。

「何と!?!」

バスターとのぶつかり合いで僅かに軌道の逸れていた牙は、ゼロの身体を掠めて往く。

着地したゼロは、再度跳躍した。奴にはもう武器は無い筈だ。掌打も既に見切っている。恐れるモノは、何も無い。

「オオオオオオオッ！」

鬨気に満ちた咆哮と共に振り下ろした必殺の閃刃は、今度こそガネシャリフの頭部を叩き割る——はずだった。

「な……ッ!?!」

ガネシャリフの頭を捉えていたゼロはとんでもないモノを目の当たりにした。敵手の頭部、そして手足が巨大な胴体の内側に引っ込んで、完全な球体と化したのだ。

そして、ガネシャリフの胴体は地面に接触するや猛烈な唸りを上げて回転し、地面を削りながら走り出した。

爆走する巨球が吼える。

「まろが何故『鉄球大魔神』と呼ばれるのか——」更に加速する「その所以、とくと味わうでおじやる！」

「チィ……ッ！」

視界を埋め尽くさん勢いで驀進する巨球を忌々しげに睨んだゼロは、踵を返して走り出した。そのまま壁を蹴り昇り、巨球を飛び越えようと身を翻す。

しかし戦闘用では無いとは云え、相対しているのはミュートスレプリロイド。一筋縄でどうにか出来る相手では無かった。

ガネシャリフの頭部にあたる部分から伸びた何かが、ゼロの肩を掠めた。

「くッ！」

僅かに態勢を崩したものの、回転が止まった事を好機と見たゼロは壁を蹴り跳び、ガネシャリフ目掛けてセイバーを突き出した。が、

「……ッ！」

圧縮された大気が、ゼロを蹴る。直後、破壊的な衝撃が全身を襲う。最初は何が起きたのか解らなかつた。流れゆく視界の奥に天井に突き刺さっている物体を見たゼロは、

小さく舌打ちした。

ガネシヤリフの弱点は、巨体故の小回りの効かなさであった。同じサイズを相手にするなら兎も角、小回りの効く相手とは間違いない相性が悪い。そこで、触腕を駆使した強引ではあるが立体的な機動を行う事で、弱点をカバーしているのだった。

ゼロは、静かに着地した。

すぐさま、身体をチエツクを行った。思った程、ダメージは無い。

安堵の息を吐くや、不気味な振動を発している巨球を睨んだ。

タネさえ解つてしまえば簡単、と云いたいところだが、あんな攻撃を何発も喰らう訳には行かない。となれば、

「次で決める……!」

決意を固めたゼロは、再度踵を返して走り出した。

読み通り、ガネシヤリフは球状に変形して追つて来ている。あとはこのまま……

確信めいた思いを胸に、ゼロは壁を蹴り昇った。

「愚かな……もう一度叩き落してやるでおじやる!」

ガネシヤリフの声を背に、壁を蹴り、身を翻す。狙い通り、敵手は触腕を伸ばした。それを難なく受け流し、後方で外壁が砕ける音を聞いたゼロは、握っていたセイバーのあの機能を目覚めさせた。

直後、触腕の破壊した外壁から大量の水が溢れ出す。

「のッ!?!」

瀑布の様な奔流をまともに被ったガネシャリフは、思わず尻餅を着いた。あまりの出来事に一瞬何が起きたか理解出来なかつた様だ。

ガネシャリフが破壊したのは、先程僧服の少年が姿を消した上のフロアの実験用水槽の排水管だつた。狙い通りに行く保証も無く正直、賭けに近い勝負であつた。が、勝つてしまえばこつちのモノ。稲光を帯びたセイバーを振りかぶつたゼロは、ずぶ濡れになつたミュートスレプリロイドの頭上に躍り出る。

「その雷はアステファアルコンの……正気か!?! そんな事をすればまるの中のデータはタダでは済まぬ! それを、そちにとつて——」

そんな事は、百も承知だ。

だが、自らの記憶惜しさにやるべき事を躊躇う程、ゼロは臆病では無い。それにデータが破壊されたとしても、『彼女達』なら必ず修復してくれるだろう、と。

だから、その刃を振り下ろすのに、一切の迷いは無かつた。

再び訪れた濃密な闇の中で、ゼロは雷の残滓を纏うセイバーを杖にして、立ち上がった。両肩を上下させ、身体に蓄積されたダメージに屈しかけながらも何とか歩き出す。

覚束無い足取りで、頭部を丸ごと失い、無残な鉄屑と化したガネシャリフの骸の脇を通り、端末の裏手にあった古いトランスサーバーを起動させた。

ゼロは備え付けの通信機でレジスタンスベースと連絡を取るべく、サポートパネルを操作した。通信は可能の様だった。此の地に足を踏み入れてからの通信障害は、大方ガネシャリフの仕業だろうが、今となつてはどうでも良い事だ。

「……こちらゼロ。レジスタンスベース聞こえるか？」

通信が繋がるや、ゼロはベースへと声を吹き込んだ。

一拍置いて、儂げな声が闇色に染まった大気を震わせる。

「……ゼロ？　ゼロなのね。良かった……いきなり通信が出来なくなつたから、どうしたのかと——」

「データは回収した」

シエルの言葉を遮る様にゼロは報告した。何故かは解らないが、不安げな少女の声を聞いて居られなかった。

通信機の向こうで面を喰らつたであろうシエルはそれでも安堵したのか、若干纏れ気味の声音でズレた返答をした。

「え？　あ……ご、ご苦労様。大丈夫だった？」

「ああ。だが、データの方はそうでもないかもしれん」

言ってから、ガネシャリフの亡骸を見る。

電子頭脳は頭部は完全に潰れている以外は、ほぼ無傷と云って良かった。が、サンダーチップによって体内の機器に影響が出た事は間違いない。現にゼロ自身もあの攻撃で、かなりやられている。

最悪の場合、ガネシャリフの記録媒体が重大なダメージを負った可能性も……

「そう……解ったわ。取り合えず、ベースに戻って来て。後の事はそれから考えましょう」

「わかった」

少女の声から疲労の響きを感じ取り、出所の解らない胸苦しさを感じたゼロだったが、直ぐにそれを腹の底に押し込んでトランスサーバーの台座に乗った。

転送が開始される刹那、ゼロはあの蒼い僧服の少年の事を思い出していた。

あいつは無事に脱出しただろうか？

今から探しに行きたい気持ちが無いでは無かった。しかし、異変に気付いた雑兵共が駆けつけて来るのは時間の問題だ。それにこの傷で動き回るのももう難しい。

だからゼロは、サーバーの光の中で少しだけ祈った。あの少年が無事でいてくれる事に。

ゼロが研究所を去った少し後、誰も居なくなつたハズの封印の間に、新たに足を踏み入れる者が居た。

新たな侵入者は、ほぼ真つ直ぐ打ち捨てられた鉄屑——ガネシヤリフの遺骸へと歩を進めた。

稼動していた頃の面影を僅かに残す骸を哀しげに見つめているのは、蒼い僧服の少年。見上げる瞳に寂しげな念がたゆたっている。

少年は、思いを馳せた。

「ゼロ……」

そつと閉じた瞼の裏に浮かぶのは、この場所で出会つた紅のレプリロイド。その強さと儚さを秘めた瞳がどうしようもなく懐かしい。

暫くして、少年の姿が陽炎の様に掻き消えた。

直後、激しい揺れが研究所を襲つた。

暗い森の外れに、その建物は建つていた。

主を失つて幾十年、いや幾世紀もの時間を孤独を食んで生きてきたであろう佇まいは、畏敬を感じさせる。

其処に命の営みはもう感じられない。

埃が降り積もり、うつすらと白く染まった教会堂内を見渡したゼロは静かに眼を閉じた。

ゼロがトランスポーターで脱出した直後、研究所は崩壊したらしい。その事を知ったのはベースに帰還して半日程たった後だった。何しろ戻った直後は蜂の巣をつついた様なそぞろ騒ぎだったのだ。

おそらくは証拠隠滅用に設置していた爆弾が、ガネシャリフの機能停止に呼応して作動したのだろう。

その後、研究所の跡地から大量のレプリロイドの残骸が見つかったが、人間の死体は無かったと云う。ならば、あの僧服の少年は無事に脱出したのか。そう思ったゼロは、レジスタンスのメンバーに聞き回って少年が住んでいると云う教会を突き止め、其処へ向かった。だが……

眼を開けたゼロは、もう一度堂内を見渡した。

忘れられて久しい廃屋に、もう祈る者は居ない。そして、其処に居着く者も。

少年は云った。近くの教会に住み込んでいる、と。しかし、実際には、此処に長い間ヒトが住んでいた形跡は無い。

では、あの少年は何故あんな事を云ったのか？

子供の悪戯——そう考えれば納得は出来る。が、腑に落ちるかは別だ。

ゼロは、あの蒼い少年がそんな事をするとは思えなかったのだ。何故なのか。記憶の無い身には、未だわからない事だらけだ。

百年前の戦争——その時代を戦い抜いた自分とそれを知っているであろう少年。本当に、解らない事だらけだ。

お前は——いや、

「俺は、一体……何者なんだ？」

その問いに答える者は、誰も居ない。

第肆話 Crazy Train (暴走列車)

序

人類最後の理想郷、ネオアルカディア。

幾多の災厄を生き延びた人々の多くは、己が身をに降りかかった災禍を忘れるかの様に造られた楽園に閉じ籠り、蜃気楼の如き繁栄を享受していた。

しかし、閉鎖された環境は人間の尊厳など、いとも簡単に腐らせてしまう。それは、生きながら死んでいるに等しい事だった。

事態を重く見た時のネオアルカディア政府は、都市を覆う忌まわしき倦怠を払拭すべく、あらゆる手を尽くした。

が、しかし、レプリロイドと人間からそれぞれ優秀な人材を集めて構成された最高評議会——人間側の役人は既に渦巻く倦怠に浸かりきり、今更逃れられぬ身。そんな彼らが如何に知恵を絞った所で名案が浮かぶ筈も無く、かといってレプリロイドにしても——全てではないが——人間の事を正しく理解しきれているとは言いがたかった。

結局、どの方策も焼け石に水と終わる事になり、そのまま数十年の時が流れた。

ネオアルカディアから遠く離れた地下ホームもその時の名残の一つであった。

巨大レジャー施設の建設計画の一部として開通したものの、直後に計画自体が頓挫した為に、いつの間にか人々からも忘れ去られた過去の遺物。今では、数本の輸送列車が通過するだけだった。

その日、物々しい空気が彼の地に満ちていた。

朝方早く、ホームに滑り込んだ装甲輸送列車。嚴重な警備体制によって守護された貨物車両に、一つのコンテナが積み込まれる。通常のモノよりもかなり小さいそのコンテナは、列車の中央に位置する重装車に納められた。

その周囲を防衛仕様の重装パントオン部隊が固めている。素人目に見ても、隙が無いのは明らかだ。例え、歴戦の勇士であっても正面から破るのは難しいだろう。

だから——彼は考えた。

天井から列車を見下ろす仮設照明を吊るす梁の上、最も濃い闇に身を浸す紅のレプリロイド——ゼロはホームを隅々まで見渡した。

セルヴォの作ったジャミングマントを纏う姿は、まるで羽を休めるコウモリの様だった。実際、単騎故に出来る事が限られ、日陰を渡るしかない身は正しく光を厭う獣と言うしかない無様なのだろう。だが、元よりゼロはそんな些細な事を気にする性質では無

かった。これは記憶の有無と言うよりは、生まれ持ったモノなのだろう。

正面が駄目なら……

視線を滑らせたゼロは、最後尾を注視した。

壱

それは、一週間前の事だった。

百年前の旧跡を流用したレジスタンスベース中層区画、ブリーフィングルーム。

元からあったモノをそのまま流用しただけが殆どのベースにおいて、その部屋も同様に百年に渡る時間の残滓を限られた空間に堆積させていた。

あちこち錆の浮いた入口のドアが、ぎこちなくスライドする。

まず始めに入室したのは、レジスタンスのユニフォームでもあるグリーンの装束に身を包んだレプリロイド戦闘部隊コルボーチームのリーダー、コルボーだった。

それから紅のアーマーを纏ったレプリロイド——ゼロとハニーブロードの小柄な人間の少女シエル、最後に技術者兼参謀を勤める学者然とした風貌の男性型レプリロイド

——セルヴオが続く。

「これで全員、かな」自分以外が着席したのを見渡してから、セルヴオが見た目に違わぬ穏やかな所作で最後に着席した。

そうして集まった面々は、時間も惜しいといわんばかりに早速ミーティングに入った。

上座にはシエルが収まっている。誰が決めたと言う訳ではないが、自然とそういう事になっていた。強いて言えば、彼女がレジスタンス組織の創設者の一人であり、リーダー格でもあるからだろうか。

その後、既に大まかに固まっていた作戦の細部を詰める議論が行われたが、慎重論を提示するセルヴオとそれに反論するコルボーとがぶつかり合っただけでなかなか進展せずいた。

「ダメだ。危険すぎる」

「んな事言っただけか！」

事の発端は、レジスタンスの財務と物資の管理を取り仕切るロバートチームからの報告だった。

隊長ロバートの個人的なツテによって、近々ネオアルカディアによる極秘輸送作戦が開始されるらしい事が判明した。しかも、積み荷が未確認のサイバーエルフらしいとの

情報もある。見過ごせないと断じたシエルは、すぐに救出作戦の立案に取りかかった。が、慢性的な人手不足に悩まされているレジスタンスに動かせる人材は限られている。

結局、ある程度自由なコルボーチームとゼロ、それに参謀であるセルヴオとオペレーターを勤めるシエルを加えた急拵えの救出部隊が結成された。

救出部隊の生命を預かるセルヴオとしては、作戦を確実に成功させる為にギリギリまで状況を見極めるべきだと主張するが、コルボーは時間的余裕が無いのを理由に強行策を訴えている。

どちらの意見にも一応の理がある故に、いつまで経つても着地点を見出だせずにはいた。

そんな膠着した現状を見かねたのか、ゼロが両者の間に入って口を挟んだ。

「俺が行こう」

その場にいた面々がゼロの提案を理解するのに、数瞬程かかった。構わず、ゼロは続ける。

「セルヴオの言う通りギリギリまで見極めた後、俺が一人で仕掛ける」

「危険だ!」

「本気か、ゼロ?」

思わず口を揃える二人。

強固な護衛体制が敷かれた輸送列車への単騎突撃。

死に行く様なモノなのは、馬鹿でも解る。が、それで意見を翻すゼロではない。金の髪の狭間に揺れる瞳の光が、強い意思を訴えている。

その時、コルボーらがヒートアップし始めた頃から黙って事を見守っていたシエルが、深く溜め息を吐いた。何かを堪えているかの様な眼差しを湛えて、ゼロに頼み込む。「……行ってくれろ？」

揺れる瞳を正面に据え、シエルは絞り出す様な調子で、告げた。黙したまま、ゼロは首肯した。

式

そして、作戦決行の時が来た。

何とか監視の目を掻い潜ったゼロは列車に潜り込むも、予想以上に隙の無い警備体制だった為に、当初の予定よりも大分離れた最後尾車両に追いやられてしまった。薄暗い貨物室は人間であれば多少難儀だったろうが、レプリロイドであるゼロには、さした

る問題では無かった。

さて、問題はここからだ。現時点で予定を大幅に逸脱している。こうなると、サイバーエルフを諦めるといふ選択肢も出てくる。

だが――

ゼロの脳裏に、少女の儂げな横顔が過る。

ゼロは今回の作戦の内容を電子頭脳内の記憶媒体から引き出し、ヘルメット内のホロカメラで虚空に投影した。

レジスタンスのバックヤードが作成した列車内部見取り図の虚像が出現する。

実際の車両数は、一致している。が、流石に内部の情報はほとんど入手出来なかった。為に、同型の車両を参考に作り上げた予想図は些か頼り無かった。

だとしても、既に賽は投げられたのだ。後は進むしかない。

先頭に近づくにつれ抵抗が激しくなっていく。屋根を伝えば空中戦仕様のパンテオンまで出張ってきている。さすがのゼロでも分の悪い状況だった。

取り敢えず、物陰に退避してサポートを要請しようとしたが、妨害されたのか通信が繋がらない。

何が起こっている？

一方、列車を後方から追跡する形で走るのは鋼鉄の重騎ライドキャリアー。牽制の為に急遽取り付けた旧式の火砲で、断続的に列車へ砲撃を加えている。

申し訳程度の広さしかないバックキャリアに押し込まれたコルボーチームは、密かに制作者であるセルヴォを恨んでいた。曰くライドアーマールのパワーとライドチエイスアーの機動性を両立したマシンだとの事らしく、本来はあまり期待するべきではないのだろうが、居住性に関してはもう少しどうにかならなかったのか？

「覚えてろよ……セルヴォ」

辛苦を刻みつつも穏やかさを湛える古樹の微笑を思い浮かべ、ささやかな復讐を誓ったコルボー。

その時、狭いスペースを更に狭くしていた通信及びレーダー機器の一つが異変を察知して警告音を発した。

「隊長ッ！」

「どうしたッ！」

「通信回線が全部潰されましたッ！」

キャリア内のコルボーチームに動揺が走った。

どういう事だ。コイツ（ライドキャリアー）の通信機能はネオアルカディアの妨害を

想定して強化しているんじゃないのか？

思わず悪態を吐くコルボー。

「クソツ……ホントに恨むぜツ！」

参

先頭から二両目まで到達すると残存戦力を一点に集中しているのか、護衛の密度が後部の比では無かった。だが、ゼロは冷静に状況を見極め、最適な行動へ速やかに移った。ガネシヤリフから抽出したデータによって、ゼロの戦力は飛躍的に上昇した。強化した緊急加速デバイスを搭載したダツシュパーツで敵をすり抜け、新装備のマルチロッドとシールドブーメランを駆使して残らず粉碎していく。

その姿は、血染めの鬼神の様だった。

門番の様に立ち塞がっていた重装甲レプリロイドを倒して機関部へと踏み込んだゼロは、シャッターの向こうに広がる光景に圧倒された。

その空間の半分を、巨大な脳髓が占領していた。否、正確には極めて有機的な機械群と言ふべきか。これらが列車全体の機能を制御しているのだろう。道理で、この列車内に居るのが戦闘用レプリロイドばかりなワケだ。

そして、何より目を引くのは巨大脳髓の中央部に埋め込まれた『眼』である。

よく見ると、それはパンテオンの頭胸部だった。他のレプリロイドならば兎も角、エックスをベースにしたパンテオンの性能ならば、これだけの代物でも制御出来ると言う訳か。奇妙な感覚に陥りつつも、ゼロは納得した。

その直後、脳髓が不気味な鉄の咆哮を上げた。車両全体が身動きするかの様に振動する。瞬後、天井が割れて一面を覆う針の群れが露になる。床にも仕掛けがある様だが、わざわざ付き合つてやる義理はない。

ゼロはフットパーツを全力稼働させて、機械仕掛けの巨大脳髓へと疾走した。が、当然敵がそれを許すはずは無い。再び車両全体を震わせる咆哮が上がると、床が勢いよく競り上がつて針天井へと伸びて行く。

ジグザグに移動して、それらを回避したゼロを今度は熾烈な火炎放射が襲う。

部屋全体に張り巡らされたトラップと、強力な武装。そうやって敵を駆逐するのが、この巨大脳髓の戦法なのだろう。冷静に判断したゼロは跳躍して焔を凌いだ。

それからは、泥仕合の様相だった。互いの攻撃が次々といなされ、両者共決め手を打

てずにいた。

限定された空間故にゼロは存分に立ち回れず、パンテオンコアの方も動きの素早い敵を捕捉しきれていなかった。

しかし、そんな状況でも、ゼロはパンテオンコアの弱点を見破っていた。

それは、中核として組み込まれたパンテオンヘッドだった。

奴を排除すれば、この部屋の仕掛けは止まるだろう。上手く行けば、列車そのものが止まるかもしれない。

そうなれば、サイバーエルフ救出も用意になる。

再びゼロは攻撃を仕掛けた。だが、周囲には強力なバリアフィールドが展開されており、並の攻撃ではパンテオンに届きはしない。

チャージショットですら減退して威力が落ち、決定打にならない。

一見、何処にも死角がない様に見える。が、ほん一瞬だけバリアフィールドが消失する時があった。

それは、火炎放射器を使用する僅かな瞬間だった。

自らの焔に焼かれないうえ、一時的にバリアを解かねばならないのだろう。

時間にすれば、ほんの数秒。だが、それだけあれば充分であった。

せり上がる床と新たに現れた無数の銃火を掻い潜り、巨大脳髓の目の前に躍り出たぜ

口。

それを狙ってか、火炎放射がゼロを呑み込まんと迫る。

灼熱の業火をシールドブルーメランで受けきると、ゼロはフルチャージしたバスターの銃口を中枢部に向けた。

迫る破滅の気配から逃れようとしているのか、蠢くパンテオンコア。

揺らぐ感情を底に沈めた無機質な黒瞳に撃つべき敵を捉えて、ゼロはフルチャージバスターのトリガーを引いた。

巨大脳髓の残骸を越えた先——先頭車両の貴賓室で、ゼロは豪華なテーブルの中央に鎮座した特殊鋼カプセルを発見した。淡い光を放つ小さな存在が、窮屈な鉄の鳥籠の中で震えている。

駆け寄ったゼロをネオアルカディアの一員と思っているのか、相当怯えた様子を見せたが、ゼロの手によつて解放されると、サイバーエルフは嬉しそうに辺りを飛び回った。貴賓室を出て操縦室を覗くと、中にもぬけの殻であった。恐らく無人制御だったのだろう計器が、無茶苦茶な数値を表示している。

どうやら、パンテオンコアを倒した事によつて制御不能に陥った様だ。

列車が大きく揺れた。

窓を見ると、屋根から振り落とされていくレプリロイド達の姿が見える。

どんどん加速している。このまま地面に激突すればただでは済まない。前方を見ると、丁度切り替えポイントを通り過ぎる所だった。

——この先は、深い断崖だったはず。

『自爆装置が作動しました。乗員は直ちに……』

列車の自爆装置の作動を告げる無機質なアナウンスが流れる。

サイバーエルフを連れて脱出しようとするが、咆哮する車両がゼロのセンサー類を刺激した。人と言えば、総毛立つ感覚と言うべきか。

奴は……パンテオンはまだ生きています！

中枢を破壊したはず——と言いたいが、こうもセンサー類が異常を訴えている以上、嫌でも納得するしかない。となれば、自爆装置も奴の仕業か。

兎に角相手をしている暇は無い。ゼロはサイバーエルフと共に、脱出路を探し始めた。

小爆発を起こす地獄行きの車両。何か、とコルボーはキャリアから身を乗り出した。

「ゼロ……」

未だあの場所にいる仲間の事を案ずる。

どうすれば良いのか必死に考えて、周囲を見回したコルボーはあるモノを発見して我知らず口の端を吊り上げた。

鮮烈なる光刃が、襲い来る鋼鉄の兵士を切り裂く。

ゼロは、後方から断続的な振動が伝わってくるのを感じ取った。

これは……爆発か？

少しでも証拠を隠滅しておく為に先に細かく砕いておいて、それが終われば今度こそ跡形も無く爆発させるつもりなのだろう。用意周到だが、積み荷がサイバーエルフだった事を考えれば当然の事か。

執念とも言える執拗さだが、それよりも、この期に及んで足止めしようとするレプリロイド達にゼロは些か手を焼いていた。

このままでは自分達もただでは済まないのに——そこまでしてネオアルカディアに

忠誠を誓う必要がある？

一瞬の迷いだった。が、同時に大きな隙でもあった。敵の攻撃をまともに喰らったゼロは、吹っ飛ばされて連結部のドアに叩きつけられた。

心配そうにサイバーエルフが、ゼロの周囲を飛び回る。

「大丈夫だ」

ダメージは軽い。問題は無い。

いずれにしても、もう迷っている暇は無い。立ち上がってセイバーからバスターに持ち替えたゼロは、敵の頭に照準を定めて引き金を引いた。

頭部を失ったレプリロイドは、ゆったりとした動作でうつ伏せに倒れた。

残骸の向こう側の車両から更なる増援がやって来たのを見たゼロは、背後のドアを開けようとした。が、厚い特殊合金で覆われた扉は嚴重にロックされていてビクともしない。

迫る敵を前に覚悟を決めたゼロは、正面突破を敢行しようとしてセイバーを構えた。

車両の壁が弾けたのは、その時だった。

飛び散る破片の先——穿たれた大穴の向こうに何かが見えた。

それは、巨大な大砲を構えたライドキャリアーであった。

「行くぞッ！」

サイバーエルフと共に、ゼロは大穴から跳んだ。

ライドキャリアーがそれに合わせて接近して来るのが見えた所で、レプリロイドとしての直感——人間で言えば、第六感と云うべき感覚——がゼロの奥底で警鐘を鳴らした。

「先に行け」

「!?!」

戸惑うサイバーエルフを押し出すと、ゼロは身体を崩れ行く列車に向けた。

次の瞬間、何者かが天井を突き破って現れ出た。

それは、朽ちかけたボディを蛇のようにうねるコードで補ったパンテオンコアであった。最早、どういう理屈が働いているのかも解らず、執念と云う他無い有様だが、ただ一つ理解出来る事がある。

何があるかと、奴は俺の敵だ。

両手のバスターを乱射するパンテオンコア。

光弾の嵐の中、ゼロは両手で構えたバスターを半壊したレプリロイドの頭部に向けた。

今度こそ、終わりだ。

ゼロは、バスターの重い銃爪を引いた。

着弾した瞬間、あまりの衝撃故に列車の車体が爆ぜると共に大きく傾いた。

その時ばかりは豪胆で通っているコルボーですら、流石にヤバイと背中に冷たいモノを感じた。

ゼロが脱出出来る程度の穴を開けられれば儲けモノだった筈、なのだが……

同じく眼を丸くしているのコルボーチームの一人が、呆然と呟く。

「やっぱ、コイツの大砲で脱出口作るなんて無茶だったんじゃ……」

苦虫を噛み潰した様な顔で、コルボーはライドキャリアーを見上げた。無骨な大砲を構える機械仕掛けの鉄巨人は、半壊した燃え盛る列車を無機質な眼差しで見つめている。

正直言つて、手に余る代物である。

——ホントに恨むぜ、セルヴオよお。

頼りになるが、些か危なっかしい頭脳担当の事を思い、コルボーは頭を抱えた。

「隊長、ゼロだ！」

俄に飛び込んだ部下の声に振り返ると、大穴の空いた列車の屋根の上に紅い装甲のレプリロイドが立っている。

周りを飛んでいる光は、サイバーエルフか？

取り敢えず、難しい事は後回しだ。

「よし、ゼロを回収したら、さっさとずらかるぞ。急げ！」

「隊長、アレ！」

「なッ!？」

再び車両を見たコルボーは、新たに出現したモノを見て絶句した。

蛇の様な、龍の様な……化け物じみた風体のレプリロイドは、ゼロ目掛けて両手のバスターを向けた。

「——急げッ！」

コルボーは、操縦士に向けてがなった。

「やってますよ！でも、あんなんがっているんじや……」

「隊長、コイツの大砲で——」

「駄目だッ！」

ライドキャリアーのキャノンでは、ゼロごと吹き飛ばしてしまう。そんな事はあつてはならない。俺達にはアイツが必用なんだ！

ゼロのバスターから放たれた閃光が、異形の大蛇を貫いた。

「よし、今だ！」

「了解！」

既に自由落下状態のゼロを回収する為、ライドキャリアーは全速力で疾走した。

結

作戦終了から一週間後。救出されたサイバーエルフは新たな名前を与えられ、無事レジスタンスに保護された。既に保護されているエルフ達と共に、アルエットの良い遊び相手になっているとは老レプリロイドのアンドリユーの談である。

「新しいエルフが来てから、アルエットがますます元気になってのう。

見てるこっちも微笑ましい限りじゃて」

作戦の事後報告のためにシエルの自室を訪れていたゼロは、研究スペースの片隅に見覚えの無いカプセルを発見する。

「これは……」

「ん、彼女もサイバーエルフよ。まだ赤ちゃん、だけどね」

端末に向き合ったまま答えたシエル曰く、研究中の全く新しいサイバーエルフとの事。今はまだ実験段階であるが、上手く行けば新エネルギーの礎になるらしい。

「この研究が上手く行けば、罪も無いレプリロイドが処分されずに済むの。そうならば、ネオアルカディアだって変わっていく筈……」

シエルの彼女のたった一つの願い。

彼女はまだネオアルカディアに希望を抱いているのかもしれない。

ゼロは、カプセルの中を覗き込んだ。強化シールドに守られた揺りかごの中で、まだ形を持たぬ何者かが微笑んでいる様に見えた。

第五話 Evil Dragon ～邪龍咆哮～

序

思えば、長い道のりだったと思う。

僅かな仲間達とネオアルカディアを出走してから今日まで、色々な事があった。途中で、多くの仲間を失った……でも、新たな希望も訪れた。

ゼロ。彼が現れてからレジスタンスの皆に活気が戻った。明日をも知れない絶望と諦観から救ってくれた古の英雄。

彼の力は想像以上だった。私たちにとって恐怖の象徴であるミュートスレプリロイドを、倒してくれたのだ。その事実、何物にも勝る希望の光になった。彼は皆の命だけで無く心をも救ったのだ。

けれど、このまま戦っていくだけで良いのだろうか？

戦う事が悪い事だとは思わない。戦わなければ私たちは此処まで来れなかった。しかし、ネオ・アルカディアは強大だ。その気になれば、寄り合い所帯でしかない私達など簡単に押し潰されてしまう。

だったら、私はどうしたらいいのだろうか？

戦う事の出来ない私には、皆を守れない。それどころか、今の事態の引き金になったのは、私の——だから。

だからレジスタンスを作った。罪滅ぼしのつもりだった。けれど、結局どんなに足掻いても、過去からは逃れられないのだろうか。

そうであるなら。私の……私のやってきた事は……

壹

幾多の戦いを経て、レジスタンスはその勢力を僅かながらも拡大させていた。ミュートスレプリロイドを倒したゼロの噂が、各地に潜伏しているレプリロイド達に広まったのだ。

果たして反ネオ・アルカディアの先鋒となったレジスタンスには、日々加入を希望する者達が殺到した。

勿論、全てを受け入れる事が出来ないが、そう言う場合は外部の協力者として連携を

取っている。

そうしている内に、組織の規模は徐々に膨れ上がっていった。

そうになると、物資の問題が大きな壁となった。

現在、レジスタンスベースに貯蔵されている分でも何とかやっていけるものの、それにも限りがある。よって、早急に対策を打ち出さなければならなかった。

いくつもの案が生まれては消え、消えては生まれ、最終的に決まったのが兵器工場の奪取だった。

名前の通り、ネオ・アルカディア軍の兵器製造を担っているその施設には、武器に組み込む為のエネルギー水晶が大量に貯蔵されているのである。それさえ手に入れば、暫くの間はエネルギー面で困る事は無くなる。その上、上手くやれば、製造されている兵器とエネルギー鉱石の精製施設を含む工場の設備もついてくる。これについて、レジスタンス内でも欲張りすぎだと言う声も上がったが、組織の現状を鑑みれば二兎どころか、三兎でも四兎でも足りない位なのだ。

だからこそ、この作戦ではレジスタンスの有するほぼ全ての戦力が投入された。絶対に成功させなければならぬ。

そして、紅の英雄・ゼロも今回の作戦に参加していた。

配置に着いたコルボーチームリーダーのコルボーは、己が身の内で、静かに闘志を燃え上がらせていた。

レジスタンス結成以来の大規模な作戦を前に、武者震いが止まらない。元来好戦的な性格の彼は、怯む事を知らない。たとえ恐れが心に忍び寄っても、それすらも燃料にして炎と変えてしまう男だ。

いつだってそうだった。だから今回も変わらない。ただ変わったことがあるとすれば、以前より仲間を信頼するようになった事だろうか。過去に親友だった男にも言われていたが、コルボーは己の力を過信しすぎる傾向にあった。

故に、あまり他人の力を当てにしない節があった。

だが、ミュートスレプリロイドとの対峙やゼロとの邂逅を経て、彼は変わった。

仲間と歩調を合わせ、共に戦う事が出来る様になったコルボーは、前よりも更に強くなっていた。

別の場所——作戦開始の報を今か今かと待っているのは、鋼の意思を持つクリスチームリーダー・クリス。元は要人警護の任にしていたエリートだった彼は、持ち前のリーダーシップで静かに味方を鼓舞した。

「皆、この作戦は僕達の行く末を決める大事な戦いだ。絶対に成功させるぞ」

愛用のシールドを装着した右腕を、天高く翳した。隊員達が呼応して雄叫びを上げる。

「もう一つ——死ぬな。必ず生きて帰るんだッ！」

また別の場所にて。

ライドマシンとそのパイロットで構成された機甲部隊・マークチーム。

専用ライドアーマーを駆るチームリーダー・マークが、隊員達を穏やかに纏め上げる。

「ここが正念場だ。落ち着いて行こう」

マークチームはライドマシンによる突撃力を武器とする部隊である。しかし、お世辞にも物資が豊富とは言えないレジスタンスの現状では、自慢の力を存分に発揮する事が出来ずにいた。

だが、もう関係無い。この局面を越えられなければ、次は無いのだ。

前線部隊よりも後方、補給線を担うロバートチーム。リーダーのロバートは有能であるが、性格に少々難があった。

「今回の作戦は無謀すぎる。立案者は大馬鹿者、でなければ狂人だ」

歯に物着せぬ言動で、身内を批判する。

だが、彼は間違った事は殆ど言わない。そのせいで誤解されやすいが、本来は強い正義感の持ち主なのである。

「でも、やるだけの価値はある」

批判の時と変わらぬトーンで、ロバートは続けた。色々と不器用なのだ。

隊員達もその辺りがわかつている旧友が大半だった。

生暖かく微笑んでいる部下達を見たロバートは「何か問題でも……？」と呻く様に言った。

レジスタンスベース・オペレーションルーム。

シエルとセルヴオを中心としたオペレーター達による支援チーム・バックヤードが、作戦の最終確等の雑事に忙殺されていた。

殺気立つ空気の中、シエルは震えていた。

今回の作戦は、今までとは訳が違う。次第によっては、多くの犠牲者が出るかもしれないのだ。

覚悟はしている。が、それでも苦しい。

彼らを救う為に、ずっと戦ってきた。決して死なせる為じゃなかった。なのに……

「シエル」

泥沼に入りかけていた思考に、穏やかな声が割って入った。殆ど反射的に巡らせた視線の先で、優しげな微笑を湛えた男性型レプリロイドが佇んでいた。

「セルヴォ」

「彼らは、死ぬ為に戦っている訳じゃないさ」

「え？」

「ネオアルカディアは、力の無いレプリロイドにとつては地獄でしかなかった。良いように使われ、やがては潰される。僕らは、そんな生き方しか出来なかった」

セルヴォも、元は技術者としてネオアルカディアの下で働いていた。なまじ優秀だった為に、人間達に危険視されて迫害を受けていた。

「正直、外の世界に出るのは怖かった。曲がりなりにも理想郷だったネオアルカディアとは全然違ったからね」

過去の大戦の傷が未だ癒えきっていないネオアルカディアの外は、現在も荒涼とした荒野が広がっている。一部の地域は再生が進んでると聞いたが、それでもこの星全体から見れば微々たるモノだ。

「だけど、何も無いなら、探せばいい、作ればいい。そうやってレジスタンスが出来て、ここまで来たんだ。だからね、シエル。彼らは決して、死ぬ為に戦っているんじゃない。生きる為に戦っているんだよ」

生きる為に――

それは、シエル自身がネオアルカディアを出奔した理由だった。最初は、ただそれだけ。故に強く固い思いだった。だが、ネオアルカディアの激しい追撃に晒される中で、決意は徐々に自責の念へと変わっていった。

仲間達が倒れていく。私が巻き込んでしまったから……

それが何よりも辛かった。

だから、私は縋ったんだ。古の英雄に。

「君は優しすぎる。だから辛い気持ちもわかる。でも、ちゃんと彼らを見てやって欲しい」

「うん……」

シエルは、自分の頭が冷えてきたのを知覚した。少し、考え過ぎたかも知れない。今の段階で結論の出ない事をいくら考えたって、結局無駄でしかない。

「それに、今はゼロが居るじゃないか。彼は皆を守ってくれるさ」

「そう、よね」

取り敢えず雑念を振り払ったシエルは、目の前の作業に集中した。

時折、瞼の奥で紅と金の残像が、現れては消えてを繰り返していた。

様々な想いが交錯する戦場。

戦士達は、作戦開始の報を待った。

これから始まるは、鉄火の狂騒。この場所は、命を喰らう地獄となる。

だが、彼らは退かない。例えば道半ばで倒れようとも、自分達の戦いが同胞の未来に繋がると信じて。

そんな場所のど真ん中に、ゼロは立っていた。

すぐ側まで迫っている始まりの前に、ゼロの心は凧いでいた。葛藤も焦燥も、今だけは遠い彼方。

この感覚を、ゼロは知っている。

——オレは、悩まない。

それは、かつての己自身。

——目の前に、敵が居るのなら。

メカニロイドの様に……否、それ以上に冷徹な戦闘マシンで居られた頃。

「アイツとは正反対だな」

まだ臆気な友の記憶。苦悩しながらも、誰かを守る為に戦った一人のレプリロイド。

甘い奴だったが、誰よりも強い奴だった。

ふと思う。アイツは、今どうしているのだろうか。

俺の様に封印されているのか。それとも、今も何処かで——
ノイズで覆い隠された記憶に、ゼロは想いを馳せていた。
それから少しの後、作戦開始の報が届いた。

式

作戦開始までのカウントダウンが終わりを告げた瞬間、ダツシユパーツをフル稼働させたゼロが先陣を切った。

遊撃を担うゼロが、セイバー片手に敵の守備隊を引つ掻き回してゆく。それに続く様に、各地で待機していたレジスタンス達が一齐に動いた。ネオアルカディアの軍勢は翻弄され、混乱の渦に巻き取られていった。奇襲は成功。主導権は、レジスタンスが握った。

ゼロが戦場を引つ掻き回している隙に、レジスタンスの各部隊は、徐々に工場の最深部へと侵攻して行つた。

抵抗は思った以上に弱く、驚くほど順調に事が運んでいた。

その違和感、最初に気付いたのは、ゼロと隊長達だった。

いくらなんでも守りが手薄すぎる。捨てて良い場所ではないはずだ。

どういう事なのか？

僅かな動揺が、隊長達の間を疾る。

その揺らぎが隊員達に伝わったのか、進撃の勢いがいくらか弱まってしまった。

直後、施設全体が揺れた。

同じ頃、レジスタンスベースでは、工場内に巨大な熱量が確認されていた。

「施設地下に巨大熱量確認ッ！」

「地下だとッ！」

「まさか、罨ッ!?!」

少女の端正な顔が、一気に青褪める。これで合点が行った。敵の抵抗が不自然な位弱かったのは、この時の為だったのだ。

モニターの向こうで、施設の床と壁が勢い良く崩壊した。

困惑するレジスタンス達の目の前で施設の床と壁が崩壊し、その奥から超硬の外郭に覆われた巨大な球状の物体が現れた。

最初は、それが何か解らなかつた。無数の突起に覆われた球体は機雷の様にも見えたが、あまりにも大きすぎる。それに爆発で壁と床を壊したのなら、無傷であるハズが無い。

だとすれば、アレは何なんだ？

『皆、聞こえるツ!?!』

通信機からシエルの声。それに呼応したのか、浮遊物が不気味な唸りを上げた。

『あれはメカニロイド——敵よツ!』

球体の中に封じ込められていたモノが目を見まし、鋼鉄の突起が真の姿を現した。

それは、古き東洋の神話に登場する龍の姿を象つた巨大マシン。

不死身の守護大蛇——ガード・オロティック。

八ツ又の頭を持つ機械仕掛けの神獣が、地を這いずる芥共に向かつて一斉に吠えた。

参

八つの首の内の二つ——赤い装甲の龍の顎が開かれ、紅蓮が地上に撒き散らされた。焔は瞬く間に広がり、逃げ遅れた者は敵味方関係無く、諸共に焼かれてゆく。

エレメントを操る双頭の大蛇が、地上を睥睨する。守護者たれと込められた願いは、敵対者への悪意として鋼の装甲から漏れ出し、意志無き機械を邪悪な神獣へと変えた。

「——怯むなッ、撃てッ！」

一足早く我に返った隊長達の号令により、残ったレジスタンス部隊による攻撃が開始された。が、超硬の外郭はあらゆる砲火を受け付けず、逆に圧倒的な火力がレジスタンスを襲った。

次々と倒れてゆく仲間達。それでも生き残った者達は、諦めずに立ち向かった。

「頭を狙え！ 攻撃させるな！」

十字砲火が、龍の頭に降り注ぐ。

灼火の豪雨を受けた龍が怯み、動きが僅かに鈍る。

「今だッ！ ゼロオツ！」

コルボーが、吠えた。

遙か直上、崩れかけた天井付近に張り付いていたゼロが、音もなく虚空に身を踊らせた。見据える先に、鋼鉄龍の頭。

自由落下による運動エネルギーが、手にした光刃に力を与える。

「ハアッ！」

研ぎ澄まされた鮮緑の光刃が、龍頭と本体を繋ぐ接続部を断つ。

切り離されて地に堕ちた二体の龍は、最後の力を振り絞るように暫く蠢いて、やがて動かなくなった。

「ヨオシッ！ 行けるぞッ！」

「勝てるぞ、皆ッ！」

クリスの鼓舞で、レジスタンスの士気が上がった。

それからは、一方的——とは行かなかつた。が、傷つき倒れながらも残った鋼鉄龍の頭が放つ氷を打ち破り、雷を掻い潜りながら、着実に龍頭を仕留めていった。

そして、全ての頭を失い、本体だけになったガード・オロティックの命運は最早尽きたかに思われた。

「これで——いや、待てッ！」

異変にいち早く気が付いたのは、マークだった。ライドアーマーのセンサーが戦場に集まる影を感じしたのだ。

「増援!? だが、この数……」

言い終わる前に、それらは来た。

出入り口から、崩れ落ちた壁の向こうから、パンテオンを初めとした兵隊達が殺到し

てきた。その数は、あまりにも多かった。

「まだこんな居たのかよッ!？」

四方八方から迫る敵の対処に追われ、誰もが——ゼロでさえも——ガード・オロティックの事を一瞬失念していた。

「——ッ!?! アレを見ろッ!」

ガード・オロティック本体が、いつの間にか天井付近まで上昇していた。無事な壁面から伸びる機械のアームが鋼鉄の球体に纏わりついているのが見える。それらは、破壊された龍頭アタッチメントと同じモノを保持している。

「成程ね」

「マーク?」

「おかしいと思ったんだ。アレを守る為とは言え、こんな数の兵隊が潜んでいたなんて……でも、漸く合点が行ったよ」

「……私にも解ったよ、ココは工廠だ——無ければ、作ってしまえば良い」

クリスが導き出した結論を裏付けるかの様に、銃弾を受けた一体が、彼らの前に転び出した。

その姿は、パンテオンとレジスタンス隊員の残骸が歪に混ざり合った異形であった。目は、暗い虚ろで出来ていた。急造品である為に、意志を与えられていないのだ。

時間稼ぎの為だけに作られた兵士……否、捨て駒だ。
見渡せば、そこかしこで似たような姿が見える。

「うわああああッ！」

「またゾンビかよッ！」

未だ途切れぬ亡者の群れに、レジスタンスは翻弄されていた。

時間稼ぎとはいえ、そこまでして何故……？

誰もが、そう思った。

その答えは、直ぐに判明した。

「何だ、アレ……？！」

誰かが震える声で呟いた。

直後、圧倒的な破壊力が辺り一面に降り注いだ。火と氷と雷が何もかも呑み込んでゆく。

やがて、生き残った者達は遙か天を仰いだ。その先に――

すべての力を解放した八ツ頭の鋼鉄龍。ガード・オロティックフルパワー形態が、機械仕掛けの傲慢さを以て鎮座していた。

バックヤードには、絶望の気配が漂っていた。

ガード・オロティックⅡフルパワー形態の威容は、モニター越しでも圧倒的だった。見え始めた勝機が遠ざかってゆく。最早、打つ手は無いかと思われた。

モニターの向こう側で攻撃が再開されていたが、有効打には至っていない。

シエルとセルヴオを中心とした解析チームが、鋼鉄龍の弱点を探っていたが……

「アイツの弱点は……ッ」

「コアは駄目なのか？」

「駄目。あの形態になってから強力なバリアが展開されてる。ゼロのチャージ攻撃でも

——届かないわ」

「八方塞がり、か」

セルヴオの声に、諦めが混じる。だが、シエルはまだ希望を捨てていなかった。

「まだよ、必ず何かあるハズ」

「諦めるな、撃ち続けろッ！」

コルボアの怒号が戦場に響く。

炎が、氷が、雷が、龍の怒りと化して弱き者を蹂躪する。絶望すら生ぬるい地獄。それでも、彼らは戦うしかなかった。

「ん？」

常に先陣を切っていたコルボーだからこそ、最も早く異変に気付けた。ほんの一瞬の出来事。だが、それは確かな光明かもしれない。

「バックヤードッ！」

コルボーからの報告を受けたバックヤードは、彼が気付いた現象について解析を行った。結果は――

「……貴方の言う通りだったわ」

映像ログには、コルボーの言った現象が確かに記録されていた。だが、ほんの一瞬の出来事。逆転の縁とするには、あまりにも心許ない。

「危険すぎる。理由だつて解らないのに」

『そっちは、見当ついてる』

「憶測よ。確証が無いわ」

コルボーの説を裏付けるには、判断材料が少なすぎる。とてもじゃないが、信用には値しない。

『憶測でも何でも、もうやるしかないんだ』

実際、前線部隊の数は半数以下にまで減少している。形振り構っている段階は、とうに過ぎているのだ。

「コルボー……」

モニター越しに聞こえるコルボーの声音は、決して自棄になつたソレではなく、何かを決意した者だけが持つ熱を孕んでいる。彼は、まだ諦めていないのだ。

「……解つたわ。全力でサポートする」

それなのに、私が諦めようとしてどうするのだ。

「ありがとう、シエル。けど、その前に兵隊共をどうにかしないとねえと」

ああ、そうだ。シエルは失念しかけていたが、ゾンビ兵士達の攻撃は依然として続いているのだ。先にコツチをどうにかしなければ。

「それなら、心配無いよ」

別のモニターを注視していたセルヴォが、少しバツが悪そうに言った。

「ロバートが生産ラインを押さえてくれた」

「ロバートが？」

「最初からこうしていれば良かったんだ、って怒つてたよ」

補給線を担当するロバートチームはリーダーであるロバートの性格及び信条から、余程の事が無い限りは戦闘に参加しない。だから、今回の様な行動は極めて珍しかった。

「増援も送るそうだ。ああ、それと、クリスに伝言。〈貸し一つ〉」

ロバートとクリスには、妙な縁があつた。

初対面の頃から馬の合わせぬ二人だが、いざとなったら抜群のチームワークを見せる何とも言えぬ関係なのである。本人ら曰く、腐れ縁との事。

『……わかった、伝えとくよ』

コルボーが、複雑そうな面持ちで答えた。

「……よし、それで行こう。合図は任せる」

そうバックヤードに答えたコルボーは、遮蔽物の影で大きく息を吐いた。僅かな時間で纏めた作戦は、穴だらけの運任せ。それでも、最善だと信じて詳細を詰めていった。

結果がどうなるにしろ、これで全てが終わる。

後は、己次第だ。

「聞こえるかッ！ 野郎共オツッ！」

遮蔽物から飛び出したコルボーは、声を上げた。

「これが最後だッ！ 勝負決めるぞッ！」

正直、自殺行為に等しい。が、これで土気が上がってくれば、ほんの少しではあるものの作戦の成功率も上がる。それに、所詮敵はメカニロイド。死ぬ気がかかれば、勝てない相手じゃない。元より、死ぬつもりは無いが。

作戦は、分散した部隊が各龍頭へと同時に攻撃するという至極シンプルなもの。あら

ゆる意味で、穴だらけ。しかし、それを成さねば勝ち目はない。

だから、いつも以上に冷静かつ迅速で在らねばならない。

「悪いな、クリス。こういうの、ホントはお前だしな」

「いいさ。たまにはね」

「助かる。あ、それとな——」

ロバートからの伝言を伝えると、クリスは無言で苦笑した。

それから、コルボーは大きく息を吸って、大音声で指示を飛ばした。

「ゾンビ共は、俺達とゼロが引き受けるッ！ 各員、散開して蛇ヤロー全てに残らず弾喰らわせてやれッ！」

そこからは、驚く程スムーズに事が進んだ。

散開した隊員達は、瞬く間に指定の位置に付いた。こちらの想定よりも遥かに早い。これも希望を見出だした意志の為せる技なのか。

ゾンビの方も、先程と比べて勢いが落ちてきている。ロバートが工廠を制圧したおかげだ。

『少し早いけど——今なら行けるわ、コルボー！』

「よし、撃てエエッ！」

八つの火線が、それぞれの龍頭に突き刺さる。が、厚い装甲には傷一つ付いておらず、

鋼鉄の中に眠る怒りの意志を刺激しただけだった。

それで良い。

こうすれば、奴は本気になってエネルギーを大量消費する。

奴の最初に放った攻撃の時、コルボーは誰かが苦し紛れに放った銃弾がコアの外殻に届いたのを見た。

バリアに阻まれるはずだった攻撃が、その時だけ届いた。コルボーは、それが攻撃にエネルギーを回したからだと推測した。

そして今、あの時と同じ状況になりつつある。開かれた八つの顎にエネルギーが集中してゆく。もし推測が正しければ――

『バリアが消えたわッ!』

「ゼロオオオオッ!」

戦場の一角――ゾンビの山が吹き飛び、そこから紅の影が天へと駆け昇った。影――ゼロは、ガード・オロティックの直上に躍り出ると、手にしたトリプルロッドをコアに向けて突き出した。

あの巨大メカニロイドを確実に仕留められるのは、ゼロだけだ!

二対の龍頭が、顎を開けて待ち構えている。

フットパーツの加速システムを使って強引に軌道を変える事で、ゼロは迫り来る脅威

を回避した。

漸く懐に飛び込むや否や、コアに内蔵された無数のバルカン砲が銃火を吐き出した。勢いが削がれる事を危惧したのか、ゼロは防御を捨てて、ただ一直線に突き進んだ。セルヴオ製のボディパーツがそれを可能にしたのだ。

そして――

閃緑の刃が、コアの外殻を貫いた。が、それだけだった。オロティック・ガードは、多少身悶えたものの、未だ生きている。

「これでもダメか!？」

落胆の声が上がった。だが、コルボーだけは、牙を剥いた獰猛な笑みを浮かべている。いつの間にか、戦場に甲高い音が響き渡っている。

それは、ゼロの武装が発するエネルギーチャージの駆動音だった。

蓄積されるエネルギー量が、徐々に高まってゆく。やがて、それが限界を突破した時、強烈な雷が辺り一面に迸る。

ロッドに内蔵されたサンダーチップの放つ雷撃が、ガード・オロティックの電子機器を残らず狂わせ、破壊したのだ。

体内をスタスタにされた鋼鉄龍は、装甲の隙間から爆炎を撒き散らしながら、断末魔の咆哮を上げていた。やがて、爆炎が全身に回った末、コアを中心に龍の身体が膨張し、

爆発した。

巨大な炎が、着地したゼロの背中を照らす。逆行によって影になった紅の装甲が、黒く染まる。

その姿は、炎を背負った悪鬼の様だった。

セイバーをロッドに持ち変えたゼロが、レジスの援護を背に跳躍、十字火炎を潜り抜けて露出した弱点を一突きに。

結

生き残ったゾンビの集団が、集中砲火で蜂の巣になった。機能停止した屍共は、崩れ落ちて残骸の山へと還っていった。

命運は決した。レジスタンスの勝利だ。

だが、それを手放しに喜ぶ者は最早居らず、ただ全てが終わった安堵の気配が彼らの傍らに横たわっていた。

そんな時に、クリスの装備していた隊長用の通信デバイスが騒ぎ出した。ベースからの緊急コールだ。

「こちらクリス」

何事か、と思いながら、受信スイッチを入れて耳を傾けた。

初めに向こう側から聞こえてきたのは、歓喜ではなく恐慌だった。

「クリスか！」

少し経った後、応答したセルヴオは普段の様子からは考えられない位、狼狽していた。

この時点で異常を察知したクリスは、早口で問うた。

「何があつた？」

「やられた、まんまと一杯喰わされた」

その後、詳しい事情を聞かされたクリスは、目の前が真っ暗になった。

かつて、ゼロとアステファルコンが死闘を繰り広げた処理場跡地。その後、放棄されて無人の廃墟と化した其処に、大量の光が降り注いだ。

それは、転送の光。遙か遠くの神の国から遣わされて来たのは、隙無く隊列を組む神々の兵士達と、土竜を模した巨大な機械の獣。

咆哮の如き駆動音を上げて、巨大メカニロイドは前進した。立ち塞がるモノ全てを打ち砕きながら――

•